539
8

始

エト20-92

# 大南北全集

第六巻

帝國圖書館藏

# 大南北全集 第六卷

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

東京 春陽堂刊行

大正 15. 2. 18 内交

539-8

# 大南北全集第六卷目次


解說及年表
挿繪解說
彌生狂言 隅田川花御所染……自一頁至三五四頁
尾上岩藤と女淸玄
猿島惣太と松若丸
彌生狂言 お染久松色讀販……自三五五頁至四九〇頁
お染久松と喜兵衞
お光竹川とおろく
春狂言 容賀扇曾我……自四九一頁至六一八頁
曾我對面と團三郎
女の對面と月小夜
春狂言 色一座梅椿……自六一九頁至九〇四頁
遠山甚三とおはつ
木屋文藏と葛飾譚


539
8

## 挿繪目次

◎隅田川花御所染（新清水の場錦繪。初代豐國筆。色刷木版）……卷頭
◎四世鶴屋南北肖像（根本「お染久松色讀販」所藏。コロタイプ版）……卷頭
◎隅田川花御所染（新清水の場大阪錦繪。國貞筆。コロタイプ版）……一七前の頁
◎隅田川花御所染（新清水の場錦繪。國貞筆。コロタイプ版）……四九頁の前
◎隅田川花御所染（隅田川の場縮緬繪。國貞筆。コロタイプ版）……一七三頁の前
◎隅田川花御所染（初演當時繪本全部。亞鉛凸版）……本文挿入
◎お染久松色讀販（大阪版根本所載各場面繪計十二種コロタイプ版）……本文挿入
◎お染久松色讀販（初演當時繪本全部。亞鉛凸版）……本文挿入
◎容賀扇曾我（初演當時繪本全部。亞鉛凸版）……本文挿入
◎色一座梅椿（初演當時繪本全部。亞鉛凸版）……本文挿入

## 挿繪解說

■卷頭に入れた木版は、「隅田川花御所染」序幕の幕切れで、淸玄尼が靑坊主になつて引込みの場である。この趣向が記錄破りであつた事は本文の解說に書いておいた。これは初演の折の錦繪である。

■大南北の肖像は、いくら探しても無かつたのが、偶然「お染久松色讀販」大阪根本に、かつら師友九郎と共に出てゐたのを發見したので、以前、歌舞伎狂言傑作集へ入れて置いたが、本集にはその「お染久松色讀販」を收錄したので、南北の肖像も、多少郭大して卷頭に入れたのである。勿論晩年の肖像らしい。

■「隅田川花御所染」新淸水の場は、實に彌生狂言の序幕らしい美しい場面で、出る役々も綺羅やかな姿のみである。この幕へ出る全部の人物を殘らず描いた大錦繪が見附かつたので挿入した三度目の所演の折の似貌であるが、斯うした繪は珍らしい。

■隅田川の場に、淸玄尼が渡し場の姿を描いた錦繪は、コロタイプ版ではハツキリわからぬかも

知れぬが、原畫は縮緬繪である。縮緬やうの紙へ畫いたものである。似顔は初演の五世半四郎であるが、出來たのはズッと後であらう。

■同じく新清水で二人立ちの錦繪は、松若丸の姿を清玄尼が姿繪に合せて見染める場である。

■「お染久松色讀販」は大阪で發行された同脚本の中に、各場面のみならず、早替りの仕掛けから衣裳の選擇、幕内の光景など、面白い繪が澤山挿入されてゐるので、その全部を縮寫して、各場面へ入れて置いた。

■他の二狂言は、錦繪を發見しなかつたので、入れられなかつた。その代り、各初演の繪番附だけは全部集めて、各場面の中へ收錄した。

岩井半四郎
松本幸四郎

# 解説及年表

## 隅田川花御所染

「隅田川花御所染」は、文化十一年三月、市村座に書きおろされた狂言で、南北が六十歳の時の作である。前年の顔見世、芝居町に火事があつて同座は類焼し、この時が新築落成の、開場式だつたのである。

「隅田川花御所染」は、南北が得意の手法の一つ、即ち二つの狂言を結びつけて一つの戯曲を構成する式で書かれたものである。二つの狂言とは、「鏡山」と「女清玄」とである。そして、この二つとも、以前からあつたものなのである。

「鏡山」は、人も知る、享保年中、松平周防守の奥殿に起つた、局澤野の事件を、加賀騒動に結びつけて脚色されたもので、天明二年の一月、江戸の操淨瑠璃の外記座で、「加賀見山舊錦繪」といふ題で上演された。作者は容楊黛であつた。歌舞伎へ移入されたのは、翌天明三年春の森田座で、岩藤が三國富士五郎。尾上が小佐川常世の役割であつた。内容は、すつかり歌舞伎式に脚色し直したらしかつたが、大

奥長局の場面多く、登場人物其他を當時の大名屋敷の寫實で行つたので、宿下がりの屋敷女中に非常な好評を博し、大入を占めた。その後も度々改作上演され、岩藤は初代尾上松助が當り役となつて、家の藝とまで推奬されたのである。その事は「花御所染」でも、岩藤役の團十郎が、せりふで度々述べてゐる。時が三月なので、南北はこの「鏡山」を背景に持込んだのである。そんなら、從前の脚本をソツクリ使つたのかといふと、決してさうではない。いま殘つてゐる以前の脚本を見ても、まるで變つてゐる事が解る。場面でも、せりふでも、決して以前の作に囚はれてゐない。さうして、今日上演される「鏡山」の狂言には、寧ろこの「花御所染」の方が、すべての點に於て非常に接近してゐるのである。

「清玄櫻姫」の狂言は、元祿の昔からあつて、有名なものであるが、その清玄を女形でゆく所謂る「女清玄」は、安永元年七月、森田座で上演した、「けいせい紅葉襠（もみぢのうちかけ）」といふ狂言が初めらしい。この狂言で、山下金作の清水寺清玄尼は

清玉姫と千原左近が密通をかばひ、その身に受けて、惡人の計略にて、玉子酒まで飲みて多年の行法を破り、思はず左近が容色に迷ひ、墮落するところ大當り。のち次第に執着して、片桐彌十郎に殺され、恨みをなすところ大出來。

といふ筋であるから、清玄櫻姫をソツクリ女で見せる趣向だつたのである。南北は、この狂言の事を知つてゐたかどうかは解らぬが、兎に角岩井半四郎に、女清玄を演らせようとして、鏡山の中へ書き込んだ。無論「けいせい紅葉襠」とは、骨子の趣向が同じなだけで、脚本は全然南北の創作なのである。南北が女清玄を選んだ眼目は、美しい半四郎を、青坊主にしたいといふ思ひつきからであつた。昔の女形は非常に色氣を尊んだから、比丘尼の役を演じても、いづれも切下げの尼か、頭巾を被つてゐるかで、青青とした頭なぞは決して見せなかつた。南北はこの記錄破りを遂行して、大當りを取つたのであつた。序幕の幕切れに、清玄尼が青頭を撫でゝ、傘をかむつての引込みは、ひどく見物を驚かせたものであつた。

清玄尼が夢を見てから、墮落する件も巧みであるが、二番目の、隅田川渡しの場は、殊にうまいものである。本筋と大して關係も無い場でありながら、實にしつとりとした情景を捕へて、錦繪を活かしたやうな場面を作つてゐる。半四郎以外、惣太の幸四郎、松若の團十郎と、名優を巧みに使つて、南北が腕一ぱいに揮つた幕である。大切の所作事は、「双面（ふたおもて）」を男姿で行つたもので、美しい場面ではあるが、有る型である。

初演の役割は左の通りであつた。

吉田の松若丸。入間の局、岩藤。吉田下部、軍助（三ヤク七世市川團十郎）奴、隅田平。松井源吾貞景（二ヤク澤

村四郎五郎）新清水の轟坊。汐入の彌藏（二ヤク市川門三郎）奴、戸田平（中山門三）奥女中、七浦。荒川鬼藤太時澄（二ヤク嵐新平）奥女中、築地野（阪東善次）奥女中、柏尾。葛西太郎龜成（二ヤク市川栗藏）奥女中、霧島。同心、無緣坊。（二ヤク桐島儀右衞門）清水平馬之助清玄（阪東鶴十郎）庄屋、杢郎兵衞（松本虎藏）北條四郎義澄（助高屋金五郎）大友一法師丸。所化、櫻ン坊（二ヤク市川龜三郎）入間家中老、尾上。軍助女房、綱女（二ヤク市川團之助）入間妹姫、櫻姫（松本よね三）大友常陸之助賴國。奥女中、庵崎（二ヤク吾妻藤藏）櫻姫の傅き、關屋（山下萬作）吉田梅若丸（岩井松之助）鳫金屋新造、釆女（岩井粂三郎）入間の姉姫、花子の前後ニ新清水清玄尼。尾上召仕、お初（二ヤク五世岩井半四郎）粂の平内左衞門長盛實ハ後藤兵衞盛長。忍ヶ岡の辻番、猿島惣太（二ヤク五世松本幸四郎）

二度目の上演は、文政三年三月の河原崎座で、名題は初演に同じく、幸四郎半四郎が上阪の名殘狂言であつた。この時は初演の折より若干訂正を施して、大切所作事の綱女を深淵の松兵衞といふ男船頭に作り替へなぞした。その役割は

平内、惣太、渡し守深淵の松兵衞（三ヤク松本幸四郎）櫻姫（松本よね三）關屋。綱女（二ヤク吾妻藤藏）釆女（瀨川路之助）常陸之助。北條四郎（姉川源之助）清水清玄（市川茂々太郎）轟坊（市川宗三郎）隅田平、源吾（二ヤク大谷馬十）梅若丸（市川高麗藏）尾上（中村大吉）お初、花子の前（二ヤク岩井半四郎）松若丸。岩藤。軍助（三ヤク市川團十郎）

その年、幸四郎半四郎は上阪して、約一年滯在したが、翌文政四年三月、中の芝居で、この「隅田川



花御所染」を出した。岩藤と惣太を幸四郎、お初と花子を半四郎の外に、尾上は澤村國太郎、松若は市川團藏が勤めたのであつた。

次は、天保三年三月の市村座で、名題は元のまゝ。この時の役割は

花子（岩井半四郎）清玄（市川鰕十郎）隅田平（阪東三津太郎）戸田平（市川團九郎）梅若丸（瀨川路太郎）尾上（市川富瀧）櫻姫、お初（二ヤク岩井粂三郎）岩藤、惣太、松若（三ヤク市川海老藏）軍助、北條四郎（二ヤク市村羽左衞門）

いつも、半四郎が、花子とお初を早替りで勤めるのであるが、もう老年になつたので、伜の粂三郎へお初を譲つたのである。

次は、天保六年三月の森田座で、名題は「花舞臺丹前俠客」——この時は、「花御所染」から鏡山の筋を拔いて、同じ南北の「浮世柄比翼稻妻」不破名古屋を交へたのであつた。「花御所染」としては、序幕の六本杉、清玄の墮落、隅田川の渡し場、庵室、大切淨瑠璃の各場を出したのであつた。また。一番目に、清玄尼が夢に松若と契る野路の玉川の場は、從來は長唄の獨吟を使つて、色模樣を見せてゐたが、この時初めて爰へ富本の淨瑠璃「櫻露の濡事」を使つて、純舞踊劇の舞臺を見せたのであつた。役割は

松若（澤村訥升）綱女（小佐川常世）清玄、軍助（二ヤク市川壽美藏）源吾（大谷友右衞門）櫻姫（瀨川菊壽）常陸之助（澤村清十郎）釆女（中山みよし）平内、局松川（二ヶ松本幸四郎）花子（六世岩井半四郎）惣太、松兵衞（二ヤク四世阪東

三津五郎）

この中で局松川といふのは、この時增補したもので、鏡山の筋を拔いたところから、清玄の庵室へ岩藤の亡靈を出す事が出來ないので、隅田川の場へこの松川を出して、軍助に殺させ、その亡靈が庵室へ現はれる筋に直したのである。

弘化四年二月の中村座「舞臺比雪花隅菌」は、薄雪物語に女清玄を組合せたもので、女清玄は、渡し場と庵室の二幕だけであつた。さうして、庵室の前へ「誓袖想稚戀」といふ清元淨瑠璃を出して、松若と清玄尼の夢の場を見せ、道具居所變りで、庵室に變るといふ趣向であつた。

惣太（阪東彦三郎）清玄尼（岩井粂三郎）采女（岩井松之助）松若、軍助（二ヤク八世市川團十郎）

同年三月、市村座では「初櫻尾上い丸藤」といふ名題で、全篇を通して出した。

惣太（三世尾上菊五郎）清玄、北條四郎（二ヤク澤村源之助）賴國（澤村宇十郎）梅若丸（阪東橘藏）庵崎（阪東玉三郎）櫻姬（吾妻藤藏）綱女（藤川花友）隅田平（中村芝十郎）お初、花子の前（二ヤク阪東しうか）松若丸、岩藤、軍助（三ヤク澤村宗十郎）尾上（市村羽左衞門）

この時の女清玄の競爭は、しうかの方が勝であつた。粂三郎は未だ若年で、たゞ半四郎の孫といふ格式から、勤めさせたに過ぎぬのであるから、そこは技にすぐれたしうかの勝が當然であつた。たゞ美貌といふ點から行つたら、しうかも美しくはあつたが、粂三郎にはとても及ばなかつたものである。

文久三年三月の中村座では「源平盛櫻柳營染」で、女清玄と遠藤盛遠を搦交ぜにした狂言であつた。清玄尼の夢には、前年通り「誓袖想稚戀」の清元を使つた。

松若、軍助（二ヤク河原崎權十郎）隅田平（市川八百藏）櫻姬（中村いてう）轟坊（阪東佐十郎）櫻ン坊（尾上覺之助）賴國、戶田平（二ヤク山崎國三郎）清玄（市川米十郎）花子の前（澤村田之助）粂の平內、惣太（二ヤク阪東彥三郎）

明治十九年四月の市村座「新淸水花御所染」は、原作へ三世河竹新七が多少の添削を加へたものである。

軍助（片岡我童）尾上、綱女（二ヤク河原崎國太郎）清玄、源吾（二ヤク中村鶴藏）梅若丸（中村兒福）江戶平（市川權十郎）轟坊（市川市友）賴國、戶田平（二ヤク片岡仁三郎）櫻姬（中村歌女之丞）隅田平（關三十郎）花子の前、お初（二ヤク中村福助）粂の平內、惣太（二ヤク中村芝翫）

岩藤と松若丸の二役は、當時若手の人氣者、我童と權十郎に一日變りに演じさせ、今の歌右衞門が人氣盛んな福助時代の女清玄なので、非常な好評であつた。

明治三十二年三月の市村座「新淸水花御所染」は、鏡山を拔いた女清玄の件のみであつた。

松若丸（中村芝鶴）花子の前（澤村源之助）清玄、軍助（二ヤク三桝稻丸）櫻姬（中村種太郎）江戶平（片岡龜藏）隅田

平（中村歌八）源吾（澤村宇十郎）惣太（片岡市藏）

「女清玄」を大劇場で興行したのは、これが最終であつた。尤も「鏡山」の方は、早くから獨立して一つの狂言となり、漸次改作されつゝ今日に及んだのである。

この脚本は、從來も活字になつて現はれてゐたが、どういふ譯か肝腎の、一番目の清玄尼が夢から墮落の場が缺けてゐた。今度は初演の折の臺本を得て、少しも洩れなく收める事が出來た。

## お染久松色讀販（おそめひさまつうきなのよみうり）

文化十年三月の森田座へ書きおろした、お染久松の書替へ狂言である。俗に「お染の七役」といつて五世岩井半四郎に、七役を早替りで演じさせ、目にもとまらぬ替りやうの鮮やかさで、客を呼ばうとしたのである。

早替りといふ事が、芝居の技巧の中でも、あまり藝術的なものでない事は明らかであるが、江戸劇史の中でも特に文化年間は、非常に早替りが流行した時代であつた。流行した原因は、要するに觀客が平凡に飽きて、珍らしいもの〳〵とばかり求めてゐた際、たま〳〵忠臣藏の七役などが喝采を得てから、急に早替りといふ事に注目し、二役三役から終には七役十一役の早替りで、單に目先だけの刺戟で、客の好奇心を滿足させようとしたのである。一部の觀客には、兎に角非常に受けるので、南北も相當に早替り芝居を書いてゐるが、流石にそれも狂言中の一つの趣向として使つてゐるばかりである。ところがこの「お染久松色讀販」は、單に早替りをさせようといふのが眼目の狂言である、理窟からいへば、箸にも棒にもかゝらない筈なのであるが、矢ッ張り南北は南北だけの事はある。出來上がつた狂言は、早替りといふ技巧を餘所にしても、立派に存在の價値がある。早替りをさせる手法に至つては、元より得意な一流である。斯うして、見た目の非常に面白いところから、この狂言は現今猶上演を絕たないのである。

初演の役割は左の通りであつた。

油屋娘、お染。同丁稚、久松。奧女中、竹川。お染母、貞昌。久松云ひ號け、お光。喜兵衞女房、土手のお六。賤の女、鶴土手のお作（七ヤク五世岩井半四郎）五百崎の百性、久作。猿廻し、左次兵衞（二ヤク七世市川團十郎）山家屋清兵衞（尾上新七）油屋丁稚、久太（桐島儀右衞門）油屋太郎七（市川門三郎）同番頭、善六（澤村四郎五郎）同手代、九助（阪東善次）鈴木彌忠太（大谷紋次）刀屋勘吉（澤村川藏）中間、權平（市川成藏）百性、寺島の彌五兵衞（坂東重太郎）油屋多三郎（阪東大太郎）藝者、お糸（中山龜三郎）髮結ひ、中の鄕の龜（阪東鶴十郎）竹川召仕ひ、お勝（岩井芳之助）油屋下女、お園（岩井梅藏）松本屋左四郎。鬼門の喜兵衞（二ヤク五世松本幸四郎）

二回目の上演は文政二年四月の玉川座で、名題は初演の折に同じ、半四郎、幸四郎、團十郎の三人は初演と同じ役割で、その外は

清兵衛(阪東彦三郎) 多三郎(市川茂々太郎) 善六(大谷馬十)

文政二年九月、半四郎幸四郎の兩人が上阪したとき、中の芝居でこの狂言を出した。半四郎幸四郎は持役通りであるが、その外は

佐次兵衛(松本幸四郎)久作(淺尾勇次郎)善六(嵐冠十郎)多三郎、清兵衛(二ヤク澤村源之助) 九助(成田屋宗兵衛)

三度目は、文政十年三月の中村座で、同じく幸四郎半四郎の一座であるから、兩人の持役は初演と同じ事である。その外の役割は

久作、佐次兵衛(二ヤク三桝源之助)お糸(中村大吉)清兵衛(中山富三郎) 太郎七(市川門三郎) 久太(市川和藏) 九助(大谷門藏) 多三郎(吾妻藤藏) 善六(嵐冠十郎) 彌忠太(中村傳九郎)

嘉永元年五月の市村座「お染久松艶讀賣」。淨瑠璃は「心中二世紫」であつたが、どういふ譯かこの時は、七役を小團次としうかで半分宛演じてゐる。

お染、お六、貞昌、お作(四ヤク市川小團次) 清兵衛(澤村源之助) 善六(中山文五郎) 久太(關歌助)九助(中村翫太郎)彌忠太(市川虎五郎)左四郎(阪東三津五郎) 太郎七(阪東三津藏) 多三郎(市川甚七) お糸(市川鯉桃) 龜(松本小次郎) 竹川、お光、久松、お園(四ヤク阪東しうか) 喜兵衛(八世市川團十郎)久作(市村羽左衛門)

嘉永三年一月の河原崎座は、名題も初演通り。半四郎の孫粂三郎に、七役を勤めさせたのである。

お染、久松、竹川、お六、貞昌、お光、お作(七ヤク岩井粂三郎)清兵衛(尾上松緑) 彌忠太(淺尾爲十郎) 多三郎(阪東竹三郎) 龜、關歌助 久太(市川猿三郎) 九助(阪東大次郎)太郎七(市川鰕十郎) 久作(市川九藏) お糸(岩井しげ松) お勝、お園(二ヤク市川團之助) 善六(淺尾奥山)左四郎、喜兵衛(二ヤク阪東彦三郎)

慶應三年八月の中村座では「二世紫由縁色上」で、坂東彦三郎が勤めた。

お染、久松、お六、竹川、お光、貞昌、お作(七ヤク阪東彦三郎) 喜兵衛(河原崎權十郎) 左四郎(嵐吉三郎)久作(市川米升 多三郎、清兵衛(二ヤク嵐璃鶴) お糸(中村いてう) お勝(尾上多賀之丞)善六(中村翫太郎)彌忠太(中村千代飛助) 太郎七(中村成藏) 九助(市川小半次) 龜(市川新之助) 久太(大谷萬作)

明治七年一月の澤村座「其昔浮名の讀販」では、

お染、久松、お六、貞昌、竹川、お光の兄作藏(七ヤク澤村訥升) 久作(中村壽三郎) 左四郎(大谷門藏) 久太(市川荒次郎) 多三郎(阪東橘三郎) 喜兵衛(阪東太郎) 太郎七(市川團四郎) お勝(阪東佳志久) 善六(澤村しやばく) お園(澤村千鳥)

明治十八年二月の市村座「昔模樣染衣更着」。淨瑠璃「比翼子飼鶯」では

お染、久松、竹川、お六、貞昌、お光、芥太夫(七ヤク助高屋高助)左四郎(關三十郎)淸兵衞(市川壽美藏)お勝(岩井松之助)多三郎(澤村銕次郎)喜兵衞(市川九藏)太郎七(市川市友)久作(澤村訥子)お糸(澤村紀久之助)お園(市川升之助)九助(關孫六)

明治三十三年一月の春木座は、外題が初演通り。

お染、久松、お六、竹川、お光、貞昌(六ヤク中村芝鶴)お勝、お作(二ヤク市川女寅)喜兵衞(澤村訥子)久作(市川鬼丸)善六(市川團次)淸兵衞(市川喜猿)多三郎(市川茂々太郎)太郎七(中村時十郎)久太(關花助)左四郎(市川團藏)

東都の大劇場では、これが打どめになつてゐる。

この中には、關西劇場の年表を略してあるが(材料が不備なので)市川小團次から系統を引いた、先代市川右團治は、この七役を非常に得意な出し物とし、度々上演して現今の右團次に傳はつたので、關西方面でも相當に舞臺に上つてゐるのである。右團治は淨瑠璃の場へ大改作を加へ、雷の中乘りなぞを挿んで受けるやうにしてゐたが、今に傳はつてゐる。

尤も、この淨瑠璃の場は、役者の都合で、江戸でも殆んど上場毎に多少の添削はされてゐる。前掲年表の中に、百姓が出たり、芥太夫が出たりするのも、畢竟は場面の賑やかしと役々の配合上、その時々に種々な人物を點出したものなのである。

## 容賀扇會我

この脚本は、文化十三年一月、河原崎座に上場されたものである。吉例の曾我狂言である。曾我狂言に就ては、前に述べてあるから玆には繰返す事をやめる。本篇は、普通の曾我狂言である。文化文政度の曾我狂言の一番目といへば、こんな物だと思つて間違ひはない。南北の本領を發揮してゐるのは、無論この時も、二番目の「封文めでたくし」の方なのであるが、その脚本が見つからぬので、一番目だけを掲出したのである。半四郎、大吉、菊之丞、團之助、粂三郎と、女形の名優が揃つてゐるので、それを巧みに使ひこなしてあるところが、先づ認められる點であらう。役割は左の通りであつた。

鬼王女房、月小夜。小林の朝日丸(二ヤク五世岩井半四郎)手越の少將(五世瀨川菊之丞)大磯の虎(市川團之助)化粧坂の少將實ハ曾我五郎時致(岩井粂三郎)曾我の團三郎。八幡三郎行氏(二ヤク關三十郎)監物太郎妹、小雪(岩井かほ世)伊豆次郎祐兼(大谷鬼次)曾我十郎祐成(淺尾勇次郎)工藤犬坊丸祐友(關龜松)梶原源太景季(阪東善次)仁田四郎忠常(市川門三郎)梶原平次景高(助高屋吟八)八幡の妻、眞弓(市川おの江)百足屋手代、次郎七(市川團七)中間、ぶる平(桐島儀右衞門)奥女中、宇佐美　市川稻三郎)同、久須美(岩井龜三郎)甘縄彌太夫(澤村

金平）曾我の禪司坊（助高屋金五郎）箱根の稚兒、閉坊丸（市川新藏）近江小藤太成家（澤村四郎五郎）工藤奥方梛の葉（中村大吉）曾我老母、滿江。工藤左衞門祐經（二ャク助高屋高助）

この狂言は再演されなかつた。

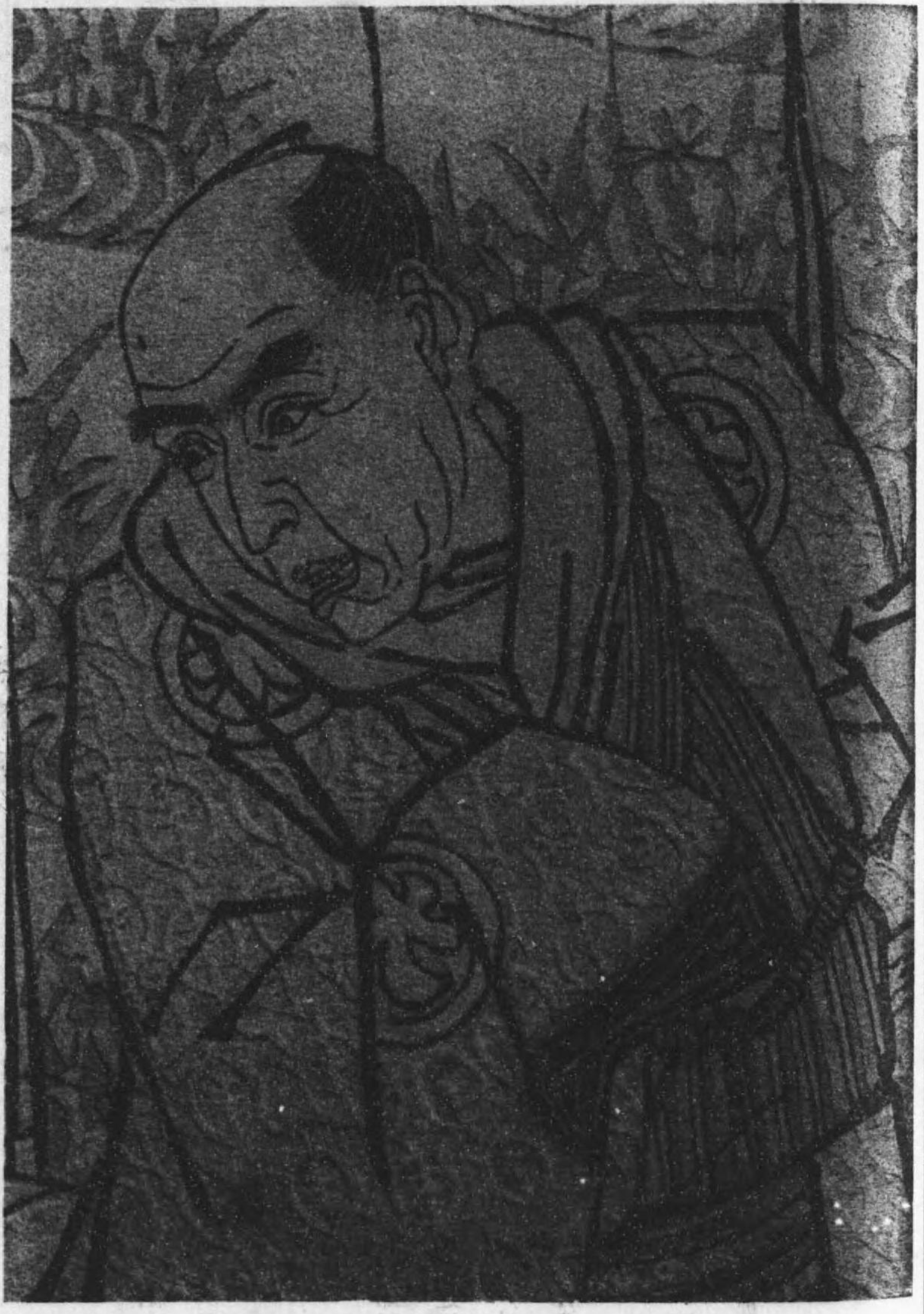
## 色一座梅椿

文化九年一月、市村座に上演された二番目狂言である。

この脚本は、お讀みになれば直ぐにお解りになる事であるが、中々特色のあるものである。第一、どんな脚本にでも附いて廻る、寶の詮議といふ事が無い。南北の作も大抵は、中心の狂言廻しは寶物の詮議にしてあるが、これには四方出の香爐といふ物は出て來ても、それほど重大に取扱かつてゐない。それだけに、これといふヤマがない。頗る平坦に、スラ〳〵と進行して、どこが中心の幕といふところも無い。それに、惡黨專門の幸四郎を使ひながら、いつもの徹底的な、惡の權化といふやうな惡黨を出さない。つまりは、南北らしくない作であるが、その代り、出てくる役は、今日でも實在しさうな人物ばかりで、性格描寫といふやうな點は、非常に細かくやつてある。大名の世繼ぎでありながら、出入りの植木屋に同居して、町人の生活に憧がれてゐる遠山甚三郎。泥坊の金を預かつて返しもならず、今更その後難を恐れてゐる葛飾十右衞門。その外、文藏にしても、仁太にしても、お初にしても、お鶴にしても、いづれ平凡な人間であるだけに、いかにも實社會にいつでも見出されさうな人々である。さういふ役のみを並べたばかりでなく、また各幕毎に、當時の世相風俗を活寫してある事は、作者が意識して描いたか何うかは知らないが、實に驚く程であると思ふ。元より南北の世話物は、それ自身いつでも化政度の江戸の一部其物ではあるが、この脚本は特に、いろ〳〵な方面に向つて、鋭いスケッチを試みてゐるその度合が強い。例へば、序幕を見ると、柳橋の料理屋とか、淨瑠璃の浚ひ會とか、無盡講の樣子とかは、如實に臺帳の上に現はれてくる。二幕目の寺院や見世物氣分、三幕目の深川岡場所の活寫、四幕目の木場附近の情景など、實に手に取るやうに映寫幕へ顯はれる。殊に三幕目で、川柳を利用した趣向など、空前絶後の奇抜さといつてもいゝ。

當時、深川の小名木川の附近で、旗本の次男が殺されたとかいふ事件が、實際あつたので、この脚本はそれを當込んだものださうである。讀んだ所では解らないが、當時の官憲は上演された舞臺を見て、その餘りに事實に近い事を認めて、この狂言の上演禁止を申し渡した。芝居では狼狽して、其筋に嘆願の結果、事實に近い幾場かを拔いて、やう〳〵上場を許可してもらつた。が、その幾場を拔いた殘りだけでは、どうしても全體の筋が解りかねたので、見物の不評となり、間もなく閉場したといふ記錄が殘

露光量違いの為重複撮影





つてゐる。最初は當込みが利いて、非常な大入だつたさうである。

兎に角、讀んでゐても面白い脚本であるが、殘念な事には最後の一部が缺けてゐるので、大詰の結末が附いてゐない。やつと簡單な筋書を附けて切にしては置いたが、誠に不本意の至りである。再版までに完本が發見されたら、必ずや增補する事をお約束して置く。

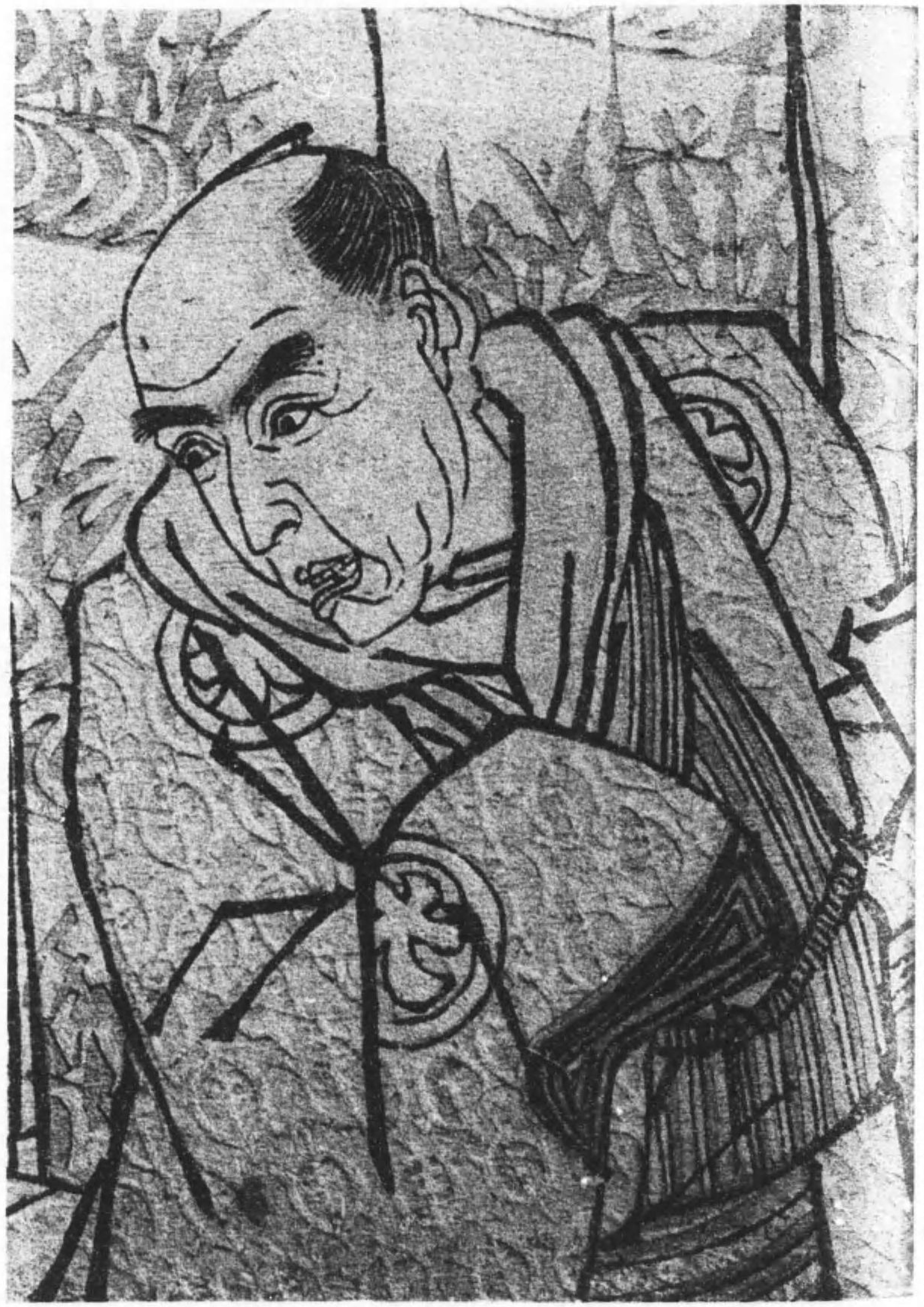
初演の役割は左の如くであつた。

遠山甚三郎（澤村宗十郎）木屋文藏（七世市川團十郎）藝者、傳馬町のお初（市川團之助）油の九平次（澤村四郎五郎）犬上團右衞門、念響上人。（二ヤク市川宗三郎）長谷部運太夫（澤村金平）天滿屋女房お北（中山富三郎）辻屋多四郎（阪東大五郎）町人、七五郎（市川常十郎）植木屋定六（坂東大吉）藝者お粂（岩井粂三郎）澤屋金兵衞（叶新平）太神樂、紋五郎（市川純五郎）遠州の九助（嵐龍藏）藝者、梅吉（市川照之助）萬八女房、お藤（吾妻藤藏）藝者筆美代（中山岩次郎）同、富勝（瀨川國三郎）萬八、娘お玉（瀨川多門）丁稚、長吉（坂東簑助）同、兵吉（澤村純二）下女、おふき（市川粟藏）船頭、十太（市川ふじ藏）十右衞門女房、おりく。與兵衞女房、牛ぎらお鶴（二ヤク瀨川路考）葛飾のお賤。天滿屋のお宮（二ヤク澤村田之助）菜賣り、曲り金の仁太（五世松本幸四郎）葛飾十右衞門（三世坂東三津五郎）

この狂言は再演されなかつた。

渥美清太郎識

露光量違いの為重複撮影





つてゐる。最初は當込みが利いて、非常な大入だつたさうである。

兎に角、讀んでゐても面白い脚本であるが、殘念な事には最後の一部が缺けてゐるので、大詰の結末が附いてゐない。やつと簡單な筋書を附けて切にしては置いたが、誠に不本意の至りである。再版までに完本が發見されたら、必ずや增補する事をお約束して置く。

初演の役割は左の如くであつた。

遠山甚三郎（澤村宗十郎）木屋文藏（七世市川團十郎）藝者、傳馬町のお初（市川團之助）油の九平次（澤村四郎五郎）犬上團右衞門、念譽上人。（二ヤク市川宗三郎）長谷部運太夫（澤村金平）天滿屋女房お北（中山富三郎）辻屋多四郎（阪東大五郎）町人、七五郎（市川常十郎）植木屋定六　坂東大吉）藝者お条（岩井条三郎）澤屋金兵衞（叶新平　太神樂、紋五郎（市川純五郎）遠州の九助（嵐龍藏）藝者、梅吉（市川照之助）萬八女房、お藤（吾妻藤藏）藝者篳美代（中山岩次郎）同、富勝（瀨川國三郎）萬八、娘お玉（瀨川多門）丁稚、長吉（坂東簑助）同、兵吉（澤村純二）下女、おふき（市川粟藏）船頭、十太（市川ふじ藏）十右衞門女房、おりく。與兵衞女房、半ぎらお鶴（二ヤク瀨川路考）葛飾のお賤。天滿屋のお宮（二ヤク澤村田之助）茶賣り、曲り金の仁太（五世松本幸四郎）葛飾十右衞門（三世坂東三津五郎）

この狂言は再演されなかつた。

渥美清太郎識

# 隅田川花御所染

# 隅田川花御所染

## 第一番目　三建目

相州鎌倉六本杉の場
新清水花見の場

**役名**＝入間家中老、尾上。入間の妹姫、櫻姫。牛島軍次。醫者、藪坂元庵。奴、丸輪鎌助。奴、隅田平、櫻姫かしづき、關屋。奥女中、綾瀬。同、梅田。同、花形。同、待乳。同、宮戸。同、淺芽。同、柏尾。同、築地野。同、七浦。同、霧島。清水平馬之助清玄。大友常陸之助頼國。所化、櫻ン坊。奴、戸田平。新清水の住職、轟坊。櫻姫かしづき、庵崎。若黨、諫早求馬。吉田公達、梅若丸。粂の平内左衞門長盛。猿島惣太實ハ粟津七郎。入間の姉姫、花子の前後ニ新清水の清玄尼。尾上の召仕、お初。吉田の松若丸。入間家の局、岩藤。

第一番目三建目始まりと口上觸れあると、大ドロ〳〵にて、向う正面より誂への黒雲、振り袖衣裳、稚兒の形を引摸へたる見得にて、花道の上へ群り出づる。向うより大友常陸之助頼國、若衆形、着流

し手甲、股引、紫の三尺帶、大小、旅形にて、菅笠を持ち、つか〳〵と出て來て花道にとまり、この雲を見てきつと思ひ入れ。小太鼓の樂になり

**頼國** ハテ、心得ぬ。いま大友常陸之助頼國が、筑紫の果より鎌倉へ下向の折柄、俄に吹寄るこの魔風、龍の吟ずる樣は見えねど、黑雲起つて群立ちし内に、怪しき振り袖の閃めく樣子は、越路に吹立つ鎌鼬、又は物の怪遮つて、魔風に誘ふ怪有なるか。何にもせよ、心ならざる雲立ぢやなア。

ト大ドロ〳〵にて、この黑雲、幕の内へ入る。雨車。向うバタ〳〵にて諫早求馬、旅形、手甲、股引、大小にて、飛脚提灯を持ち出て來て

**求馬** 若旦那常陸之助さま。

**頼國** 家來諫早求馬、後れたが參つたか。

**求馬** 只今のはやち風にて後れましたが、俄の風雨に驚きましてござります。

**頼國** 殊に雲中に怪しき衣類の、見えたるは心得ぬ。

ト思ひ入れあつて

親人常陸の大椽百連さまには、鎌倉どのへ御敵對にて家滅亡、某先非を悔ゐて降參の相願ひ、比企の判官どのゝ取持ちにて相濟み、その下向の途すがら此あり樣、何はともあれ鎌倉へ急がん

求馬、參れ。

ト大拍子になり、頼國、求馬、幕の引付へ入る。又ドロ〳〵、雨車、大石の降る音、雨窓暗くなる。

本舞臺、三間の間、眞中杉林の梢、東西は立延びし杉の大樹、何れも本杉皮葉の茂り。舞臺前は黑雲の幕、手摺の樣にして、すべて杉立の梢魔所空中の體。眞中の杉の梢に吉田の松若丸、さらけ、おどろなる稚兒の鬘、振り袖、衣裳にて楊柳笛を啣へ、杉の枝を引執へ、疲れたる體。矢張り大ドロ〳〵、雨車、土石の音にて幕明く。

ト松若丸あたりをきつと見る。風の音、谺の鳴り物になり

**松若** 吉田の少將惟貞が嫡子と生れ、幼年ながら禁庭の守護たり。我れ思ふに、吉田の家を承繼いでも神祇官、殊に入間家へ養子の身、武將の榮華を見るに羨ましく、一度謀叛を企てゝ、四海を掌握なさんずと、家出をなせしその折柄、叡山颪に誘はれて、何者なるか連れ行くと、思へば暫し放心して、あたりを見れば相摸の國の高山、或ひは富士ケ根、豐前の彥山、瞬く内に日本國中、飛行自在は魔界の術、勿體なくも後鳥羽院、汝をこれへ連れ來りしは、魔道の望み、内裏の寶楊柳笛、魔術を以て取得たれば、其方に與へて反逆の、囮となして大望成就、楊柳笛を授くると、思へば

又も放心して、下界へ落つると思ひしが

　　トあたりを見て

まだ高山の雲中にて、杉の梢にとゞまりしか。正に下界は大日本。

　　ト我が着物を見て

世間の年は早立ちしか。魔道の一日は世界の三年、これ三悪の苦みならん。何にもせよ、我が念願の時來れり。ハヽア、面白し〳〵。

　　トきつと下を見て

この杉立の根本へ下りて、世の有樣を、ソレ。

　　ト又大ドロ〳〵、土石の音にて、松若丸舞臺前の雲の中へ飛び下りる。チヨン〳〵にてこの杉の梢の道具を段々とせり上ぐる。これに隨ひ、舞臺前の黒雲の幕、次第々々に引上げ、好き程にこの幕を切つて落す。

　　本舞臺、三間の間一面に杉の大樹、うしろ黒幕、鎌倉六本杉の體。上の方に新宮奉納の手水鉢、右の鳴り物にて道具とまる。ト、ドロ〳〵打切る。

　　ト薩摩浄瑠璃〽峨々たる巖、靉々たる雲、攀ぢ登る六根の、杉に魔風を誘ひけり。



　　ト、ドロ〳〵、誂への鳴り物になり、粂の平内左衞門、かつらきの樣なる、さばきの鬘にて蠟燭を灯したる鼎を冠り、御忌衣仕立ての異形の姿にて、附太刀、足駄を穿き、時詣りの見得にて、鐵釘を持ち、鐵槌を振り上げ、賴國をきつと見て居る。賴國、右の形にて刀に反りを打ち、平内左衞門に詰めかけ居る。下の方に松若丸、右の形にて、牛の形の石に倚りかゝり氣絶の體。これを一面にせり上げる。鳴り物打あげる。薄ドロ〳〵、凄き合ひ方。

平内　某粂の平内左衞門と變名して、入間家へ入込みしも、一度平家の世となさん爲。いま鎌倉へ在番の折を窺ひ、毎夜々々の時詣り。この牛石を神と定め、卽ち魔所なる六本杉へ鐵釘を打ち、まだその上に一ヶ國に一首つゝ、首塚を築き源家調伏、今宵滿願の夜に當つて、妨げといひ、大事を聞いたる汝こそ、いま首塚の標とせん。

賴國　ヤア、烏滸がましき平内左衞門、この大友常陸之助が、鎌倉へ降人となつて下向の折柄、窺ひ知つたる平家の殘黨、其方を討取り我が手土產。それに何ぞや某を、首塚の標とせんとは不屆き者、今一刀に

　　ト切つてかゝるを平内左衞門、立廻りにて附太刀を拔き、一討ちに切りつける。賴國肩先の血汐胸へ滴り、ドロ〳〵にて、玉つきの御鏡現れる。平内左衞門見て

平内　さてこそ所持なす怪しき御鏡。

ト取上げ、きつと見て

こりや聞き及ぶ大友家の重寳、牛王の御鏡。いま手に入るは、我が大望の成就なさん時來れるか、エヽ忝い。

ト御鏡を懐中して冠りし鼎を取り、蠟燭の火にてあたりを窺ひ、松若丸を見て

さるにても、心得ぬは童が氣絶、形といひ、そぼろの様、様子ありげなこれなる男子。心を付けて

ト風の音になり、平内、松若丸の側へ行かうとする。この時、松若丸「ウム」と息を吹返す。また凄き合ひ方。平内、手水鉢の柄杓に水を掬ひ、松若の側へ行き

この水飲んで心をつけよ。

ト松若、平内の持ちたる柄杓に手を掛け、水を飲まうとする。ドロ〳〵にて柄杓の水熱湯になり、燒酎火燃える。松若苦しむ。平内驚き

柄杓の水の、熱湯に燃ゆる様子は。ハテ、訝しい。

ト松若あたりを見て



松若　して、この所は

平内　相州鎌倉、六本杉の天狗谷。

松若　さては下界の大日本、相州鎌倉、武將の住ふ在國なるか。

平内　心が附いたか。

ト松若を介抱せうとして懐へ手を入れ、思はず都鳥の一巻を引出し

平内　こりやこれ慥かに。

松若　それを。

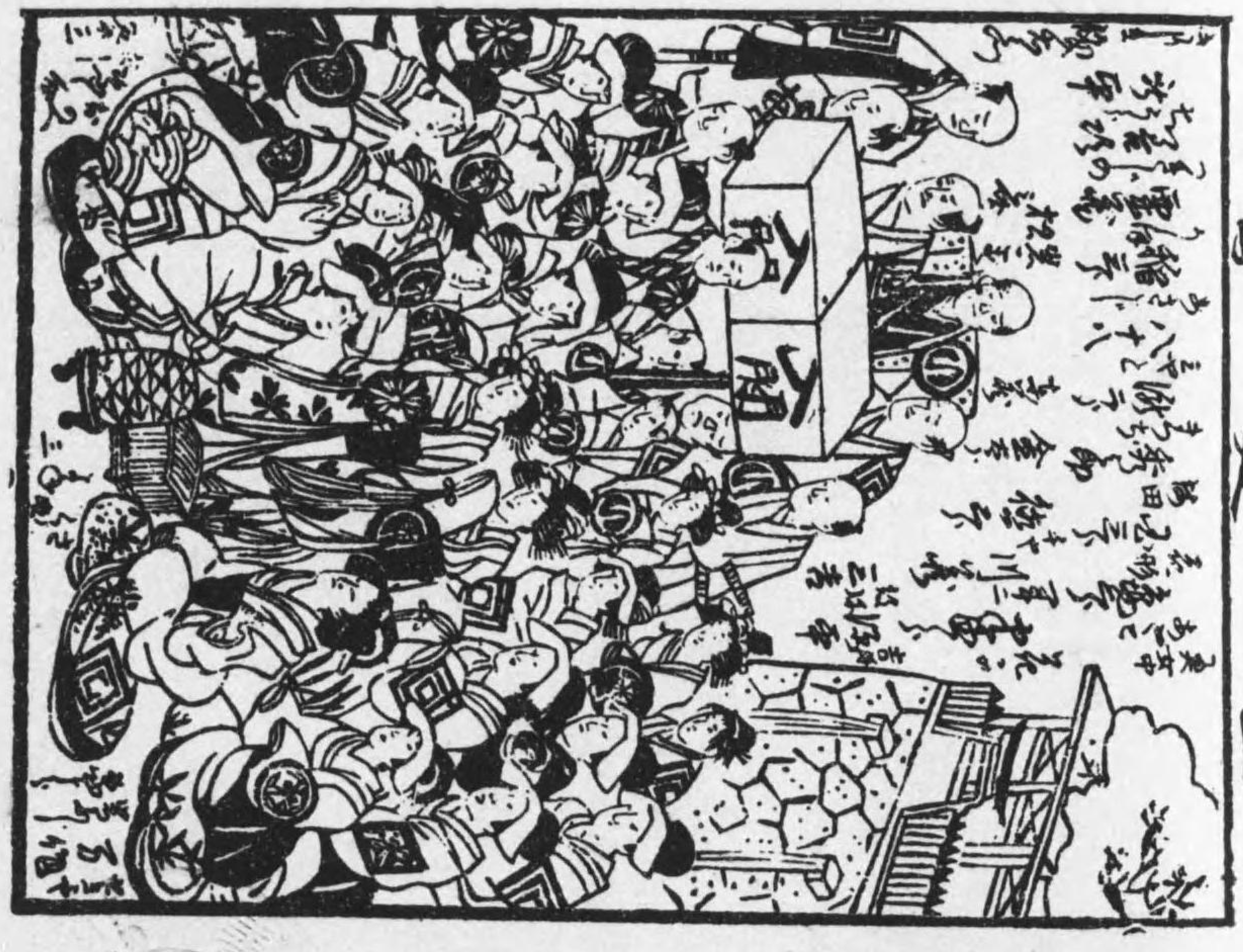
ト立廻りにて、松若丸、手早く引ッ奪り、懐中する。平内思ひ入れあつて

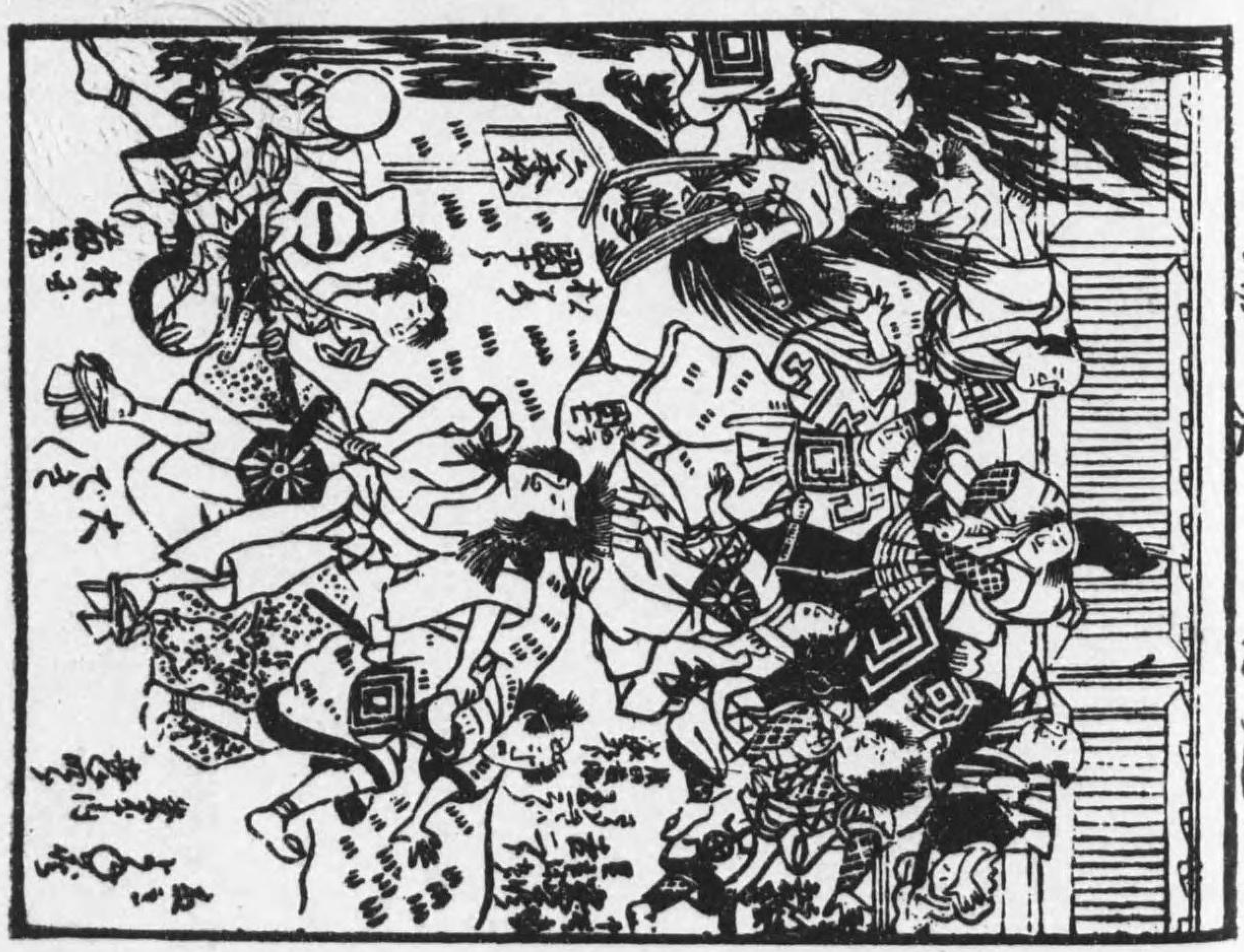
平内　ハテ、心得ぬ童が有様。今この所へ正丑滿に時詣り。望みある身の我れなれば、おことが様子、包まず語れ。

松若　すりや某に

ト三味線入りの谺になり、松若、牛石に腰を掛け

望みある身とあるからは、定めて聞きも及ばれん。四海を望む逆叛人と、疑ひかゝりし某は、吉田の嫡子松若丸、家出をなして本望遂げんと、思ふ折柄魔風に誘はれ、後鳥羽院の靈ましく〳〵て







鎌倉一家義時親子に恨みあつて、直ちに源家を亡さん、首領となれよと勅諚にて、楊柳笛を賜れば、いよ／＼謀叛と心の定め。して、其方は、何人なるや。

平内　さては吉田の松若丸。

ト松若の懐へ手を突込むを振り拂ふ。立廻りにて平内は御鏡、松若は一巻を落すを、互ひに取替へ、取上げて

松若　こりや聞き及ぶ大友の重寶、牛王の御鏡。

平内　疑ひもなき都鳥の一巻。

松若　この御鏡を所持すれば

平内　平家の残黨、後藤兵衛盛長。

松若　さてこそ汝も鎌倉一家を

平内　討ち亡さんかねての叛逆。

松若　して、過ぎ行く月日の年號は。

平内　承久三年彌生の頃。

松若　某魔風に誘はれしは、承久元年。

平内　すりや、三ヶ年のその間。世の盛衰とは云ひながら、松若丸を逆心と云ひ立て、北條家の讒言、
家臣松井の源吾が悪事にて、少將惟貞横死の上、吉田の家は早や滅亡。

ト松若きつとなり

松若　すりや北條家の讒言にて、家は滅亡。猶もこの上、鎌倉一家を討ち亡して

平内　平家の仇を報ひん時節。この盛長と合體なさば

松若　日頃の本望成就なさんは瞬く内。

ト兩人思ひ入れあつて

平松　ハテ、心地好やなァ。

トこの内頼國心付き、苦みなが

頼國　エヽ、殘念や口惜しや。手柄始めに其方を討取り、悪逆無道の根を絶たんと思ひしに、不覺を取りしか。さては吉田の松若丸も、いよ〳〵叛逆、今某が冥途の道連れ。

ト松若へ切り付けるな

松若　小癪な頼國。

ト立廻り。

平内　小事は大事、おッ片づけよ。

松若　可哀や命の寐くされ時。

ト立廻りにて頼國の刀を引つ奪り、見事に切つて捨てる。頼國又ウンとなる、直ぐに松若、杉の枝を取り

松若　心變ぜぬ堅めのしるし。

ト枝を差出す。この時後へ求馬、菅笠を持ち、窺ひ出でゝ

求馬　お主の敵。

ト杉の枝を引つ奪る。松若それなりに求馬を平内の方へ押やる。平内引ッ捕へ、杉の枝を取つて

平内　杉の文字は木扁に久し。

松若　まッこの通り木扁を取れば

平内　久しく合體。

求馬　うぬ。

ト又かゝるを平内、求馬を取つて投げ

平内　其しるしには

松若　この御鏡。



ト御鏡を出す。求馬「それを」と又かゝる立廻り。

平内　都鳥の一巻。

ト出して見せる。

平松　慥かに預かり。又の再會。

ト兩人懐中する。日覆にて大勢「ハヽヽ」と笑ふ聲する。

松若　嬉しや魔道の彼の悦び。

トきつと思ひ入れ。また頼國起上がり

頼國　思へば〳〵

ト松若にかゝるを、立廻りにて頼國の腹へ突込み、直ぐにぽんと首を打落す。

平内　常陸之助が首は、しるしの首塚に。

松若　我れもこれより變名して、入込む方便の常陸之助。

平内　出來た。

ト求馬心付き

求馬　うぬ。

　　　　ト松若へかゝるを引ッ捕へ
松若　我が手の内の擬勢の礫。
　　　　トまた求馬を投げやるを平内取つて投げる。
平内　ハテ、天晴れな。
松若　又の再會。
　　　　ト谺になり、松若思ひ入れあつて下座へ入る。平内見送り
平内　ハテ頼もしい、若者ぢやなア。
求馬　汝を討つて主人へ供へやう。
　　　　ト平内へ切り付けるを、立廻りにて
平内　エヽ、數にも足らぬ働き立て。
求馬　觀念。
　　　　ト風の音になり、求馬、平内へ打つてかゝる立廻り。平内、求馬を切つて捨てる。風の音雨車になる。
　　　　平内、空を見て笠を取上げ、雨を避ける。これをキツカケに、ドロ〳〵、しつぽりした合ひ方。平内、足駄を穿き、悠々と向うへ入る。チョン〳〵道具替り、眞中の杉を引上げ、引落しにして、杉の並木櫻の大木になる。



　　　　本舞臺、三間の間、淸水の舞臺、高欄つき喰作り、破風際より内は觀音堂、狐格子、唐戶附きの出入り。奉納の繪馬大分。この内に紅葉傘を掛けたる繪馬、象鼻、組み物惣朱塗り極彩色。眞中の石段、中二階まで打拔き、平舞臺、上の方龍神の宮、鳥居、音羽の瀧、三筋本水にて瀧壺へ落つる仕掛け。爰に枝垂れ櫻咲き亂れあり。所々に櫻の幹、吊り枝見事に、すべて淺草新淸水の體。右のドロ〳〵と双盤の音にて道具とまる。
　　　　ト雨窓明るくなる。直ぐに三味線入り賑やかなる行列の鳴り物になり、東の揚げ幕より中間可助、牛島軍次、對の模樣羽織看板にて、緋のもんばのゆたん、庵に木瓜の樣に入間と苗字の紋の付きたる挾み箱を擔ぎ二行に出て來る。次に絹羽織の先徒士六人、振つて出て來る。次に、模樣の看板羽織にて緋もんば紋付き袋入りの長刀を擔ぎ、その跡より花子の前、さゝぎ付きの廣振り袖裲襠、衣裳にて誂への金地の扇を持ち、麻社杯の侍ひ一人、股立にて、朱の爪折、筒守りの付いたる長柄を差かけ、きり禿のお小姓守り刀を持ち、次に櫻姬、櫻の模樣、さゝぎ附廣振り袖、裲襠衣裳にて、扇を持ち、これも麻社杯の侍ひ股立にて、朱の爪折、筒守りの付きたる長柄を差かけ、きり禿のお小姓、守り刀を持ち、梅若丸、お小姓にて、三寶に蒔繪の御朱印の箱を戴せ持ち、腰元四人、定家文庫、莨盆二つ、

その跡より岩藤、衣裳襠取にて、日傘をさし、扇を持ち、尾上、衣裳襠取にて、日傘をさし、扇を持ち、その跡より櫻姫の傳き關屋、奥女中淺茅、待乳、都、綾瀬外三人、留め袖。跡より奥女中築地野、霧島、柏尾、七浦、いづれも箱せこ、日傘をさし、扇を持ち出て來る。次に奴隅田平、草履を持ち、石濱官藏、看板羽織にて、茶辨當、醫者藪垣元庵附添ひ、中間大勢挾み箱を擔ぎ、合羽籠三荷、紺看板の定紋、侍ひ二人、股立羽織にて大押へ。この行列順よく出て來て、中の間のあゆみを渡り、本花道へかゝる。ずつと跡より猿島惣太、汚き布子の拵へ、一本差しにて、草履大分竹にて擔ぎ出て來る。皆々本舞臺へ來て、關屋、庵崎、床几へ毛氈を敷き、花子の前、櫻姫床几にかゝる。皆々並好く列ぶ。惣太、つか〳〵と行かうとするを、侍ひ制して

**侍ひ** 慮外者、扣へぬか。

**惣太** モシ〳〵、わしやァお局樣と草履取りに用のある者。どうか逢はして下さりませ。

**侍ひ** 扣へをらう。

　　　トきつと云ふ。

**惣太** ヘイヽヽ。

　　　ト恟りして跡へ寄つて居る。



**侍ひ** お供廻りは、眞珠院の休息所に扣へ召され。

**皆々** ハアヽ。

　　　ト行列の人數下座へ入る。

**岩藤** お二方樣へ申し上げまする。今日はお日柄も好う、空も長閑に春の麗か。その途すがらといひ、清水の花盛り、咲きも殘らず散りもせず、一入のお慰みと存じられまする。

**尾上** 草木心無しとは申しますれど、時を知つての花盛り、お氣晴らしに御覽遊ばされませう。

　　　ト花子の前、櫻姫、櫻を眺め

**花子** 清水の千本の櫻みな咲かば

**櫻姫** うへおし人の見も榮えなん。

　　　ト三味線入りの音樂になり

**軍次** 姫君樣には斯樣な景色を御覽あつて、お歌でも遊ばされませう。拙者なども憚りながら、眺めは盡きませぬやうにござりまする。

**花子** 牛島軍次の云やる事なれど、眺めある櫻木の、花は散りても根に歸れど、歸らぬは云ひ號けの松若さま。

櫻姫　花の蕾みのお方なれど、情なや御謀叛の、惡名を受け給ひ、お家出なされてその後は

築地　身はほの〴〵と明け初むれど、櫻に曇る横雲の、お尋ねなれどお行くへ無う。

關屋　博士陰陽師に占はせ給ひしに、散り行く花のお命にて、御縁も桐ヶ谷なれば

淺茅　鎌倉の松ヶ岡へお入りあつて、かねてのお願ひ。櫻も法の花なれば、花の紐解く法華經に、眞如の月の御方を、お迎ひ申して今日の御剃髪。

待乳　御身はあはれ三衣にて、墨染櫻のお姿を、世に流れ行く音羽の瀧。

花形　新清水のお導師にて、紅粉黛の粧ひの、花の盛りの黒髪を

梅田　おろし給ふはおいとしい。花のふり行く後の世を、お願ひあるは普賢象。

宮戸　法の門出の家櫻、殿御ゆゑには浮世をば

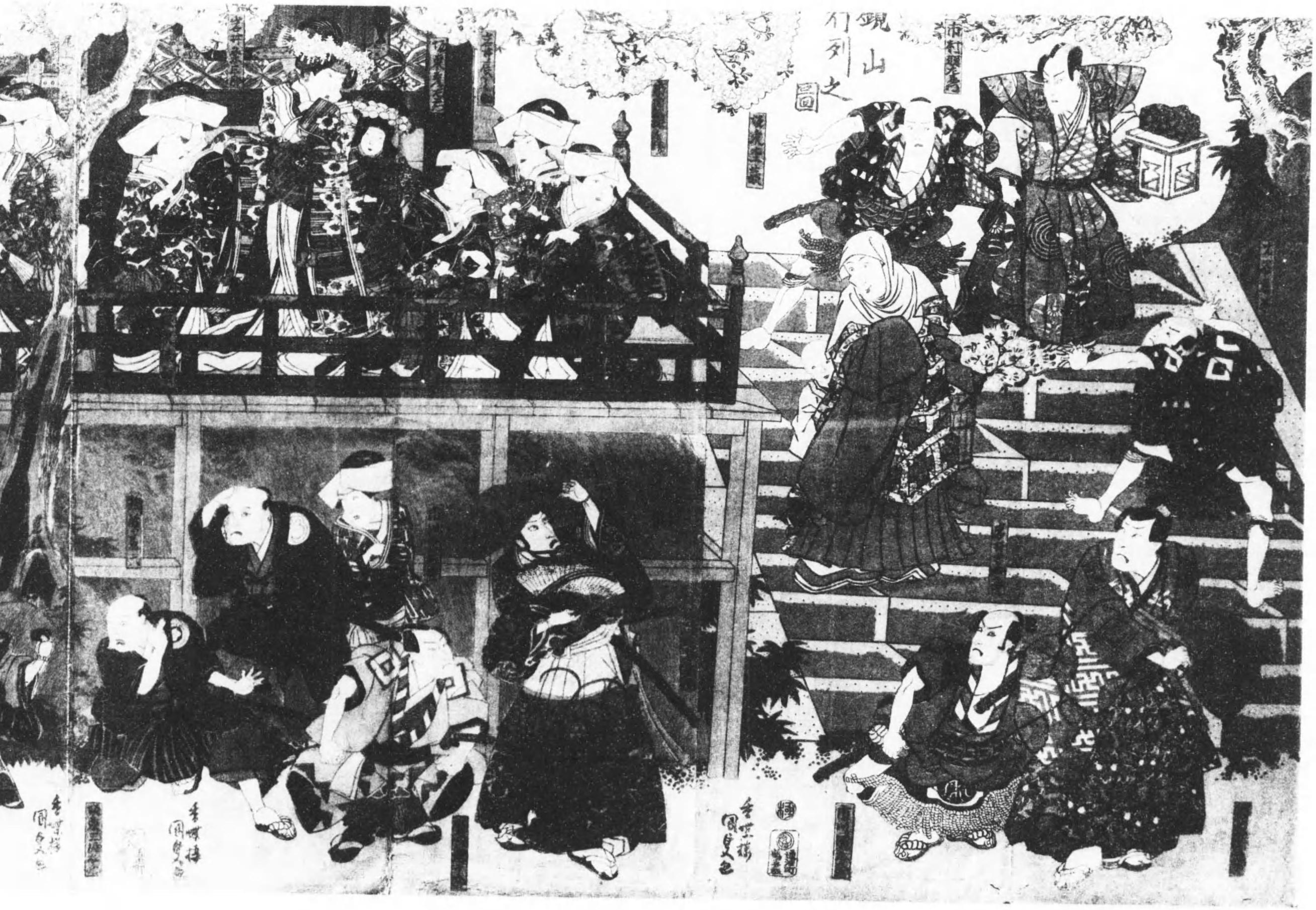
綾瀬　淺黄櫻と思し召し、未來を助かるお誓ひは、枯れたる木にも花の咲く

霧島　觀音樣のこのお庭で、見る花よりもお團子の

築地　臼でつきじの石々より、強い男の杵先で

粕尾　搗いてもらうて夜をこめて、有明櫻伊勢櫻。

七浦　ふだん櫻の好い殿御と、だかれて一重八重櫻。


鏡山行列之圖

皆々　花子さまにはその花が、お目に着かねど私しどもは

皆々　眺めに飽かぬぢや、ござりませぬかいなァ。

花子　花物云はねど香にぞ知る、早う染衣の身の願ひ。

七浦　さつても我折れ、云ひ號けばつかりで、殿御を御存じないお姫樣ゆゑ、其やうに御意遊ばします
れども

築地　ちよつとにても御存じなれば、思ひは築地の島よりは

柏尾　日本國が夜々の、睦言かごと思ひ出しても、首筋元がぞく〳〵と

四人　たまつたものでは、ござりませぬわいなァ。

岩藤　これは又しても皆の衆のざれ言、嗜ましやんせ。

ト思ひ入れあつて

今日は御遊山とは申せど、大切なる清水詣で。花子の前さまには、入間家の御惣領なれば、吉田の松若丸さまを、お聟がねとして御相續のお定め。殊に姫君より松若さまへお云ひ號けのしるしに、世にも稀れなる赤地の錦の、富田裂れまで遣はされましたる御仲。そのお云ひ號けの松若さま、お行くへ知れざる上、お果てなされしと、博士にも申し上ぐるに依つて、操をお立て遊ばされ、

御剃髪のお願ひなれど、大殿さまにもお聞入れなきゆゑ、いつぞやお家出遊ばされ、鎌倉松ヶ岡へお入りのところ。

**尾上** 扇ヶ谷には、花子の前さまのお乳の人の娘、綱女といふ者あつて、在所ながら親切の者にて、花子さまをお留め申しての御介抱、江戸表のお屋形にては、御一家さま方始め、岩藤さまにも御相談の上、御家督は櫻姫さまと相定まり、尤もお妹君には、大友常陸之助さまへお入りのところ、大友家滅亡にて、常陸之助さま御降參のお願ひにて關東へ御下向、これ幸ひと、お聟がねとしての御家督、それゆゑ鎌倉より、花子さまをお呼び迎へ申して、お願ひの御剃髪。

**岩藤** 櫻姫さまには、いよ〳〵入間家の御家督と定まり、お云ひ號けの常陸之助さまにも、近々降參のお願ひ相濟みますれば、御婚姻取結び

ト梅若御朱印の箱を持ち、前へ出て

**梅若** 大切なる關の東の、八ヶ國の御朱印は、これに守護してござります。

**岩藤** この清水の觀世音の、御寶前にて御祈念の今日なれば、隨分と心を付けられてよからう。

ト花子思ひ入れあつて

**花子** かねての願ひ自らが、心の内はこの扇。

ト持ちたる金地の扇をひろげて見せる。岩藤尾上見て

**岩藤** 「過ぎし日の暮るゝを急ぐ夕顔の

**尾上** 花の便りを誰れか問はまし」

**皆々** その三十一文字は。

**尾上** 花子さまのお詠み遊ばされしを、勿體なくも順徳院の御叡聞に達し、あの扇へお書し賜りし御宸筆。

**花子** 夕顔の、花は暫しの盛りにて、思へばこの身に適ひし詠歌。

ト尾上思ひ入れあつて

**尾上** それに引換へ櫻姫さまの、短冊のお歌は。

ト櫻姫懐より袱紗に包みし短冊を出し

**櫻姫** 「九重に立つ白雲と見えつるは、大内山の櫻なりけり。」

**尾上** お七ッの時お詠みなされし、このお歌について、櫻町の中納言さまより、幼少には珍しきと御賞美あつて、短冊を下され、お名もそれより櫻姫さま。殊にお歌のお心も、九重に立つ白雲とあるからは、入間家の御家督、思へば〳〵、おめでたい事でござりまする。

ト岩藤思ひ入れあつて

岩藤　尾上どの、お默り。

尾上　エ。

岩藤　こなさんは物知りぢや。和歌の心をよく御存じ。花子さまが御惣領で、御剃髪のお望みゆゑ、お妹御の櫻姫さまへ御家督譲り、その御剃髪の無いずつと先から、櫻姫さまの御家督は知れてあるのかえ。

尾上　左様ではございませねど、花子さまへ松若さまを、お聟君にお取り遊ばさるゝ筈なれど、お行くへ知れねば姉君には、お妹君へ御家督譲りあつての御剃髪、以前より御家督の事は知れませねど斯様になりまする知らせの端でがなございませうと申す事。それを、其やうに仰しやりましては。

岩藤　成る程、それではわたしが無調法、こりや恐れ入りまする。その筈でもございませうか。先岩藤どのは、お局頭の出頭で、松緑院というて今では御隠居、わたしはその姪でございまして、お部屋子に上がつて居て、段々と立身いたして、只今ではお局頭の岩藤、これと云ふも、伯母松緑院のお庇、何も存じませぬ無調法者、尾上どの、何かと宜しう、お指圖なされて下さりませ。





ト わざと手をつき慇懃に云ふ。

尾上　これは又、痛み入つたる御挨拶、なんの指圖を致しませう、私しこそ、やう〳〵と

岩藤　今度始めてのお中老役の尾上どの、こりや、さうありさうなもの。何にも知らいで物識り顔、流石は成りあがりの町人の娘。ほんにお里が顯はれるわいなう。

尾上　ハイ。

ト思ひ入れ。

岩藤　お二方には、この岩藤が附いて居る。この上にも、ツベコベ〳〵と口出しすると、中老役とは云はせぬ。以後は屹度嗜ましやんせ。

ト思ひ入れあつて

ほんに忠義と云へば、尾上どのゝ召仕ひは、強う主人を大切に勤むるといふ評判、名は何とか云ひましたの。

尾上　ハイ、初と申しまする。

岩藤　オヽ、それ〳〵、お初であつた。好い女子を置き合さんしたの。

ト軍次思ひ入れあつて

軍次　これについても、アヽ、姫君さまのお歌はお氣の毒なれど、松若さまにはお果てなさるが、お爲と申すもの。

尾上　そりや牛島さま、なぜでござります。

軍次　これ御覽じませ。

ト懐より松若の繪姿を出し

叛逆人の惡名なれば、この通り繪姿を以てお尋ね。さすれば生きながらへて、鎌倉どのへ召捕られでもなされては、恥辱の上の恥ではござりませぬか。

尾上　すりや、それが松若さまの

ト繪姿を取つて見る。

花子　尾上、これへ。

尾上　ハツ。

ト繪姿を差出す。花子取つて思ひ入れあつて

花子　云ひ號けの名はあれど、これまでお目にかゝらねば、お顔見知らぬ松若さま、惡名を受け給ひ、お尋ねの身となり遊ばされ、お姿繪にてお目もじ致しまするは、思へば／＼、詮ない浮世でご





ざりまするなア。

ト思ひ入れあつて

せめては剃髪した上で、お姿繪に御回向を

尾上　御殊勝な事でござりまする。

ト岩藤思ひ入れあつて

岩藤　アイヤ、申し、そのお姿繪に御回向とは、お道理さまではござりまするが、お尋ねのお身を描きし事なれば、天下の科人、申さば穢れ。それを御回向なさるゝを、御殊勝な事と云はしやんす、尾上どのゝ差出口、何にも知らいで、ホヽヽヽ。

ト笑ふ。

尾上　エヽ。

花子　イヤ、岩藤の詞なれど、剃髪すれば貴賤に依らず、回向するのが佛の敎へではないか。

ト思ひ入れ。

岩藤　エ。

ト思ひ入れ。

花子　光明皇后の例もあれば、法の道には穢れも無い。それを咎めて尾上に彼れこれ。

ト云はうとして

なんと、其やうなものではないか。岩藤、軍次。

軍次　ヘイ、、、。

ト思ひ入れ。岩藤こなしあつて

岩藤　花子さまは、鎌倉の尼寺近くお入りなされて、佛門の道は、おいたはしい事なア。

ト空嘯いて云ふ。花子綺姿を懐へ入れる。このうち惣太、煙草のみながら花子に見惚れ、思ひ入れあつて

惣太　ハテ、女中衆といふものは好いものだ。先刻から見れば、いま坊主にならうといふ花子さまとやら、途方もない美しいものだなア。

ト花子の方へ、づか／＼と行くを、隅田平引退けて

隅田　野郎め、こりやア何處へ參る。

惣太　知れた事。あのお姫様にちよつと抱きついて

ト隅田平を見て

ヤア、こなたは草履取りの隅田平だな。おらア草履の錢を取りに來たのだ。

隅田　コリヤ／＼、何を云ふ。知らないぞ／＼。

惣太　知らないもすさまじいわい。お局さまと云ひ合して

隅田　ハテサテ、つがもない事を云ふが、この隅田平は、知らない／＼。

ト云ふなとこなしにて

何事も呑みこんで居る程に、草履の事も鼻緒の事も、必ず申すな、扣へて居れ。

ト惣太に呑みこます。

惣太　さういふ事なら、草履の事も云ふまいが

ト花子へ思ひ入れあつて

その鼻緒、ぢやアない花子とやら云ふお姫様、どうも美しいわい。

軍次　あなたは誰れあらう、花子の前さまと申して、吉田の松若さまへ御婚禮あるお身なれど、その松若さまのお行くへが知れぬゆゑ、今日御剃髪あつて、尼になりなされるのだ。

惣太　エ、、

ト愕りして

あのお姫様が坊さんに。ハテ、惜しいものだなア。

ト花子へ思ひ入れあつて、何か思案してこなしあり。

惣太　これを思へば、大和當麻の中將姫も、こんな事であらうかい。

尾上　これなる下部は、當麻寺へ參詣して、中將姫の事知つて居やるか。

惣太　當麻寺どころか、此やうに草履を賣つて歩く、雇ひ辻番の足輕だが、六十六部同然に、國々を歷巡つて

花子　アノ、日の本の有り難い御寺をば

尾上　存じて居るなら、花子さまへお慰みに

惣太　抹香臭いわしが話しを

皆々　申し上げてたもいなう。

ト時の鐘、合ひ方になり

惣太　先づ都には祇園、清水、智恩院、金閣寺御覽なら、好いたほは選りどりのお前方より、お姫樣へお話し申すは、有つた事の幽靈話し。

女皆　どうやら聞かぬ先から、恐ろしいやうでござりまする。




惣太　マア、有り難いのは高野山、上り下りの山の間が三里の餘、それから先が不動坂、そこが女人禁制で、奧の院は石塔だらけ。無名の橋を渡ると、向うが名代の蛇柳、丁度そこで日は暮れる。しよほ〱雨で淋しい胴中、風に柳がザワ〱と、身の毛もよ立つ、柳の蔭から稚兒の幽靈、佛つくつて色蒼ざめ、申し〱と聲かけられ、恟り驚くまいか、氣も魂ひも飛んでしまつて、わしやア夢中。

女皆　アレ、怖いわいなア。

ト皆々に執付く。

惣太　コレ、驚くな。某ことは吉田の嫡子松若丸、いつぞや都で天狗に攫はれ、其のち高野山にて、世を果敢なくも相果てたれど、修羅三惡道に迷ひ居て、浮みもやらぬ亡者の身、何卒娑婆にて追善供養あるならば、成佛得脱疑ひなし、無緣の其方を頼む程に、某緣者の輩あらば、この事を告げてくれと、云ふかと思へば、忽ち消えて常の通り。なんと恐ろしい話しぢやアごんせぬか。

皆々　エヽ。

ト恟りする。

花子　すりや、松若さまには、いよ〱お果て遊ばされ、三惡道に迷ひ給ふとや。

ト隅田平せゝら笑ひ

隅田　野郎め、嘘ッ話しは廢めにしろ。

惣太　成る程、さう云ふであらうと思つた。嘘でない證據といふは、これだ。

ト懐より一巻を出し

その松若の幽靈どのが、僞りならぬ證據とあつて、渡してくれた都鳥の一巻とて、吉田の重寶、これで疑ひ晴らさつしやりませ。

ト一巻を差出す。關屋取つて花子へ渡す。

花子　成る程、これがあるからは、松若さまには

皆々　お果てなされて三悪道に

花子　其お迷ひを晴らすは、自らが剃髪して。

惣太　して、その一巻は。

尾上　お姫樣へ差上げたれば、きつと御褒美は後程御沙汰。

惣太　必ず間違へて下さりますな。

岩尾　左樣なれば、花子さまには



花子　阿闍梨さまへ、かねての願ひ。

ト立上がり行かうとするを、櫻姫ちやつと留めて

櫻姫　姉上さま。

皆々　まづお入りあられませう。

ト唄になり、花子先に綾瀬手を執り、櫻姫は關屋手を引く。岩藤尾上皆々附添ひ、石壇の上へ入る。

隅田平行かうとするを、惣太とめて

惣太　コレ、待ちやれ。金剛草履を拵へさせ、その錢は如何する。

隅田　ハテ、そりやァ合點だから遣ると云ふに。

ト行かうとするを引とらへる。

惣太　また逃げべいと思つてか。錢が無ければ草履を此方へ。

ト隅田平の懐へ手を突込み、裂れに包んだ金剛草履を引出す。

隅田　これを遣つてつまるものか。

ト引ッ奪らうとする。立廻りにて草履を前に置き、双方より手を掛け

惣太　よく積つて見ろ。入間家のお局さまの頼みぢやァないかえ。

ト大きな聲で云ふ。

隅田　コレ、靜かにしやれな。

ト押へる。三味線入りの禪のツトメになる。

惣太　おれが居る忍が岡の辻番へ、われが來て頼むには、下野國阿曾の沼は、鴛鴦のたんと棲む池で、そこに生へる菅菰で、草履を作つて穿せる時は、鴛鴦の思ひにて、忽ち色深くなつて心が亂れるとの事。その菅菰で金剛草履を作つてくれろと頼むから、ゑつちらおつちら、阿曾の沼から菅菰を取つて來て作つてやつたに、その錢を寄越さないとはあんまりだ。それを彼れこれぢくねると、入間の屋敷へ踏んごんで、お局さまの頼みで斯う／＼だと、草履の事を蒔き出してしまはう。

隅田　サア、そりやア。

惣太　但し錢を寄越すか。

ト隅田平思ひ入れあつて

隅田　よいワ。錢をやらう。明日とも云はず今宵で

ト錢を百出して「ソレ」と投げやる。惣太取つて

惣太　なんだ、金剛草履の錢が僅た百か。猿唐人めが。



ト錢を投げつける。隅田平きつとなり

隅田　これぢやア不足か。

惣太　知れた事だ。何か玉に使ふ金剛草履、百や二百で賣られるものか。

隅田　さうして、いくらだ。

惣太　百兩と云ひたいが、負けてやつて五十兩。

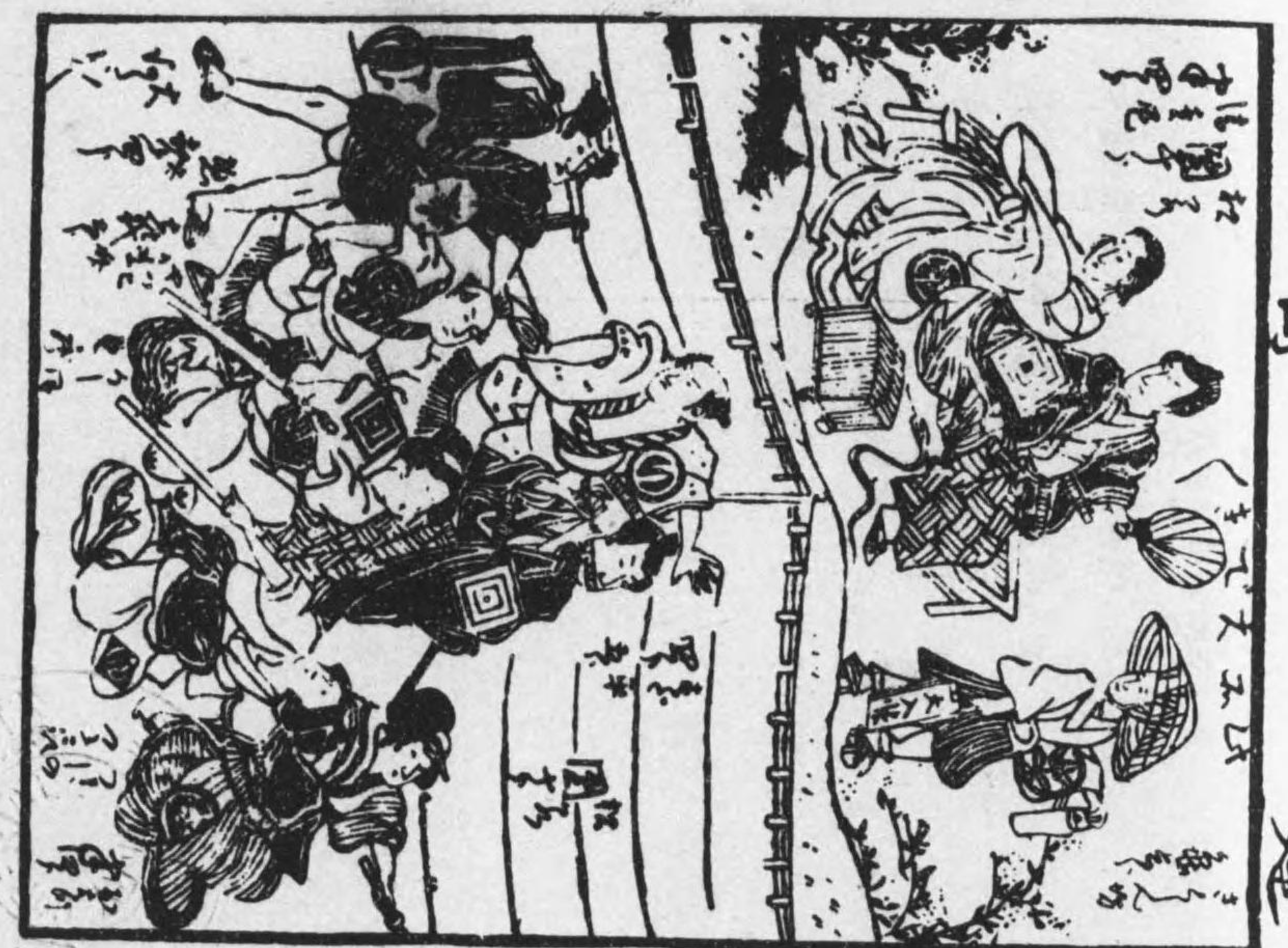
隅田　アノ、小判でか。

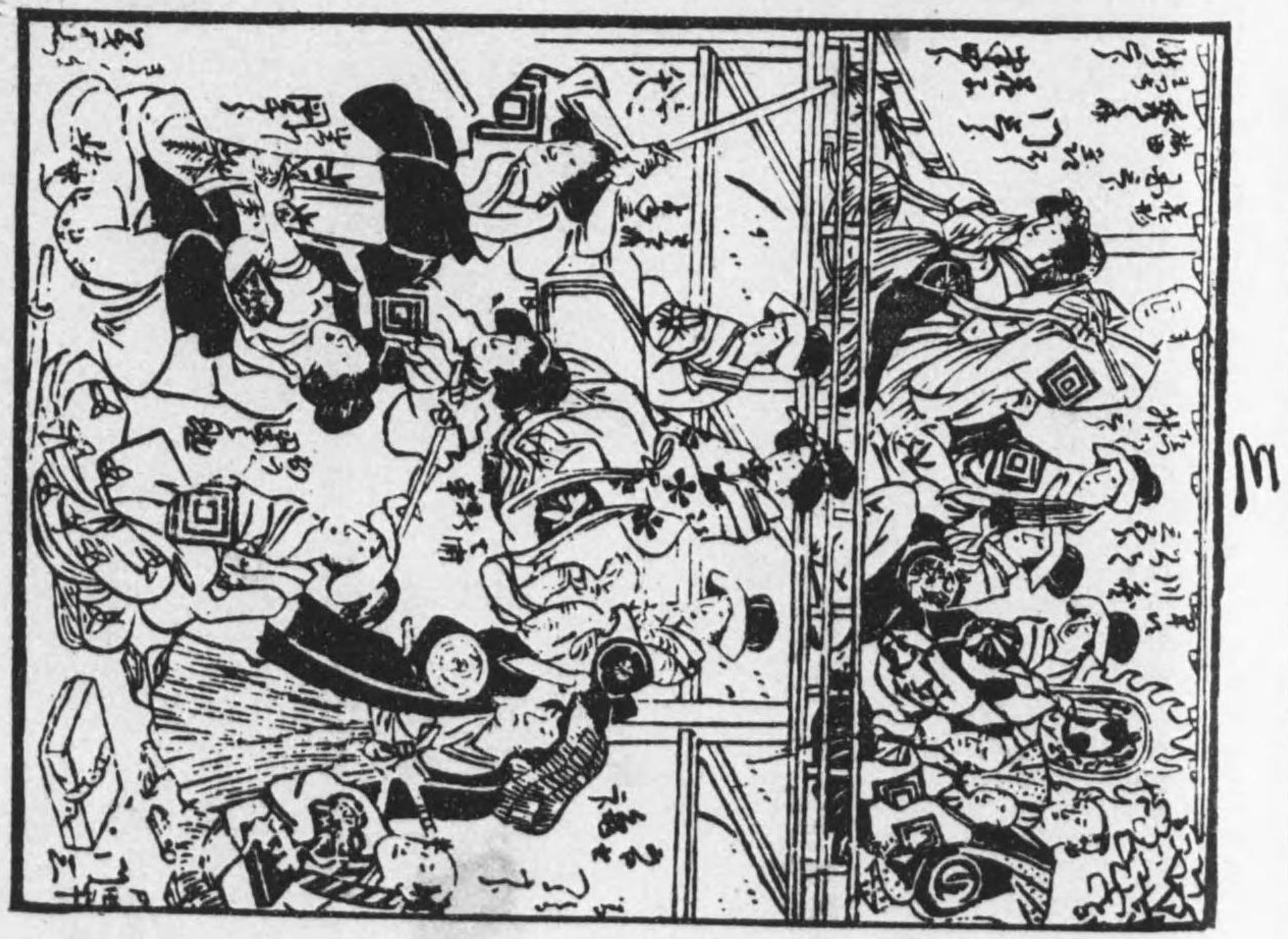
惣太　この金剛草履を作らして、今日坊主になる花子の前にこれを穿かせて、心をば亂させ何かの越度、それを囮りにお局の、一物ありと睨んだる、眼は違はぬ金輪奈落、金剛草履の作り人が、惡い事をば聞き出す、猿島惣太といふ足輕だ。五分でも引けを取るのぢやごんせぬ。

ト隅田平思ひ入れあつて

隅田　成る程、さう云へば隱すに及ばぬ。お局岩藤さまの計らひで、花子さまを呼び寄せ、この清水で出家させ、この草履を穿かせて心が亂るれば、その上にて罪に取つて落すのだ。それだに依つて草履の代は望み程……べら坊め、勝手にしろえ。

ト金剛草履を手早く取る。双盤早めになり、隅田平石段へ逃げて入る。惣太きつとなり





惣太 うぬ、駄折助め。

ト追つ駈け、石段へ踏みかけ、思ひ入れあつて

いふヮ。いま逃げても、取る所で取つて見せうヮ。したが、草履は格別、粂の平内さまより渡さ
れた都鳥の一巻、吉田家の殘黨を味方に付けよと云ひつけられたが、あの一巻彼方へ遣つたが、
剛氣に大事な物だと見える。これといふも、あの花子の前の美しいのにうツ惚れたばつかりだ。
アヽ、女にやァのろい奴よ。

ト思ひ入れ。唄になり、惣太石段へ入る。清水舞臺の後にて

呼び 御祈念の刻限。

ト音樂になり、舞臺の上へ櫻姫、御朱印の箱を持ち、綾瀬、都、待乳、淺茅、各自篳篥、笙の笛、琵琶、
羯鼓を持ち出て來て

櫻姫 入間家の御朱印御祈念の爲

女皆 樂を奏し奉りまする。

ト皆々樂を奏する見得。誂へ三味線入りの管絃になり、向うより松若丸、百日棒茶筌、衣裳袴にて、
大小、熊谷の深編笠を冠り、扇を持ち、鎌助、草履を持ち出て來る。東の揚幕より清水平馬之助清玄

剃立て大髻、袴羽織、大小にて、深編笠、扇を持ち、戸田平、笹龍膽の紋散らしの蒔繪の箱を三方に載せ、持ち出て來て、花道に止まり

松若　ハテ、咲いたりな花盛り、されば日本の花の王と、貴賤賞美をなすゆゑに、櫻を賦したる唐歌は無し。

清玄　櫻は花の優美にして、全く春の暖氣を受けて、開くは仁の姿なり。

鎌助　旦那のお供でこの奴も、お江戸櫻の花見とは、舞臺も花の新清水。

戸田　おいらは構はぬこの跡の、酒屋で一杯青ッきり、ぐつと引ッかけ山櫻。

清玄　ハテ麗かな

奴二　景色ではごわりまする。

ト松若思ひ入れあつて

松若　ハテ、面白き祈念の樂。聞きしに違はぬ關八州の

ト云はうとして

我れも暫く黄鍾調に、笛を合せて慰まん。

ト懐より袱紗包みの以前の笛を出し、調べる。櫻姫思ひ入れあつて

櫻姬　ハテ、合點の行かぬ。樂に合する橫笛は、何處であらん。

ト松若笛を調べながら、淸玄も本舞臺へ來る。女形皆々見て

淺茅　アレ、お姬樣、御覽遊ばせ。深編笠でお顏は見えねど、笛を調べて

ト櫻姬舞臺から見て

櫻姬　どうやら御風俗が

都　若しやこの程よりお下りある、お云ひ號けの常陸之助さまか知らぬ。

女皆　ほんに辛氣な。お笠をお取りなさんせいなア。

淸玄　ヤア。

ト編笠を取る。

戶田　アレ〳〵、淸水の舞臺に櫻姬さまが

ト松若、笛を懷中して

松若　戀と花との盛りぢやなア。

ト編笠を取つて床几にかゝる。

淸玄　ハテ、其許には見慣れぬ御仁。



松若　某ことは九州浪人、比企の判官どのゝ取持ちにて、鎌倉御所へ降參の者。

淸玄　ムゥ、この程聞き及んだる、大友常陸之助賴國どのでござるか。

松若　いかにも。願ひ相濟むまでは當地に旅宿。

淸玄　身共は淸水平馬之助淸玄と申す、鎌倉武士でござる。

ト床几にかゝり、煙草のんで居る。始終右の鳴り物にて、この石壇の上より、櫻姬、綾瀨、都、淺茅、待乳、築地野、霧島、柏尾。七浦は御朱印の箱を持ち出て來て

女皆　申し、お姬さま〳〵。

ト櫻姬嬉しきこなし、松若見て

松若　これは櫻姬。

ト云はうとするを

綾瀨　アヽモシ、櫻でそこらがまばゆうて

ト櫻姬思ひ入れあつて

櫻姬　恥かしいわいなう。

戶田　お旦那、アレ、お恥かしいと仰せられまする。

ト清玄衣紋を繕ひ

清玄　櫻姫どの、恥かしい事はござらぬ。こなたさへ水心あれば、此方は魚心。その上にては御親父郡領どのへ、申し入れたらよろしうござらう。この儀は定めて承知でござらうが。

櫻姫　エ。

ト合點のゆかぬこなし。淺茅思ひ入れあつて

淺茅　成る程、御承知らしい事でござりませうぞいなア。

清玄　さういふ事なら、思ひの丈を筆に云はせて

ト懷より文を出して、そつと櫻姫に渡す。取つて見て恟りして

櫻姫　思ふ君樣まゐる。焦るゝ、清水清玄。

ト云はうとするを

清玄　エヘン〳〵。

ト云ふなと咳拂ひ

戸田　畜生め〳〵。

ト清玄の脊中を叩く。



櫻姫　エヽ、穢はしい。

ト文を後へ抛り、松若の方へ行かうとする。皆々とめて

女皆　アヽモシ、それでは

清玄　どうぞ色よい

ト女形皆々思ひ入れあつて

女皆　サア、お返事やら御挨拶を……ほんに好う御參詣でござりましたなア。

トこの内戸田平この文を拾ひ懷へ入れる。

清玄　某とても鎌倉御所より、預かり奉る鯉魚の一軸祈念の爲、持參いたして只今參詣。

ト一軸の箱を出して見せる。

七浦　此方にても關八州の、御朱印の御祈念の爲

ト同じく御朱印の箱を出して見せる。松若見て

松若　見ますれば入間家の御朱印、清玄どのゝ一軸も、皆一對の蒔繪の箱。

清玄　實朝公武將宣下の折柄、家々の重器へ下さるこの箱、何れも笹龍膽の御紋散しの同じ蒔繪……これ幸ひに御朱印を

ト云はうとして

明日こなたの館にて、清玄の一軸も、共に内見でござれば、いま改めて、お渡し申さん。

ト箱を明け、一軸を改める。

關屋　此方にても、御祈念は相濟みましたれど、猶も御寶前にて御祈り。

戸田　一軸お受取りあられませう。

關屋　ハア。

ト辭儀して、櫻姫に受取れと教へる。櫻姫、清玄より受取る。

清玄　して、觀音堂の内陣へは。

關屋　その一軸を、御大切に致されて、梅田どの、御案内。

梅田　畏まりました。

ト一軸を受取る。

清玄　然らば祈念に

皆々　清玄さま。

清玄　戸田平、參れ。



戸田　ネイ。

ト唄になり、清玄思ひ入れ。梅田、一軸の箱持ち、下座へ入る。皆々跡見送り

女皆　邪魔は拂うた、櫻姫さま。

櫻姫　ほんに憎らしい。

女皆　あなたに惚れ申して、どうも斯うもなる事ぢやござりませぬ。

櫻姫　常陸之助さまには、好うこそ今日は

松若　浪人のつれ〳〵、清水の花を眺めて心の樂み。併しながら某降人の一埒、比企の判官どのゝ取持ちにて、鎌倉御所へ相濟まねば、思はずも婚姻の延引。

鎌助　ハテ、小ぢれつたい。丁度逢うたは、明いた口へ持ちかけた旨い色事と思つたに、これぢやァ牡丹餅へ鹽を付けて食ふやうで、旨くないわえ。

女皆　サア、その御婚禮は、姫君さまにも、お待かね遊ばされて……今日の花見にお出でなされたこそ好い幸ひ。

築地　それ〳〵。マア、前祝ひにちよんの間を

柏木　物を買ふにも、約束の手附といふ事もあれば、ナア、皆さん。

七浦　それが無ければ姫君さまにも、あなた樣のお心を、お疑ひ遊ばされまする。

　ト松若思ひ入れあつて。

松若　その疑ひの無い證據に、きつとした誓ひの印を遣はさう。

女皆　櫻姫さま、此方からもおしるしに。

　ト櫻姫思ひ入れあり。此うち隅田平出て來て、こなしあつて、床几の上に寢腹這ひ、見て居る。七浦
　もどかしがり

七浦　何も其やうに、辛氣に思し召す事はござりませぬ。爰にある關八州の御朱印を

女皆　滅相な、どうしてマア。

霧島　ハテ、大事ござりませぬ。どうで姫君さまのお好きなされた、お聟さまの事なれば

築地　それ〳〵、どの道入間家の御夫婦なり、誓ひの印に上げられても、矢ッ張り此方へ戻す道理。

七浦　イザ、御朱印を

　ト箱を明けて差出す。櫻姫御朱印を取る。

淺茅　こりや斯うなされては如何でござりませう。お疑ひの無いやうに、御內證で御婚禮のお杯なさる、
　遊ばされたその上にて



松若　云ふにや及ぶ。盡未來まで變らぬ夫婦。

櫻姫　オヽ、嬉し。

　ト寄りそふ。

四人　こりやモウどうも

　ト皆々こなし。隅田平、床几より落ちる。皆々恟りして

女皆　エヽ、隅田平どの、恟りしたわいな。

隅田　お姫さまの色事て、とんとたまらぬ。

四人　御婚禮がお待遠なら

女皆　もうこの上は合圖を定めて、お屋形へお忍びの

隅田　ハテ、ぢれッたい。それまでは待たれない。どこへなりと。

女皆　して、御朱印の

隅田　箱の片付、下郎が合點、爰構はずと。

女皆　お出でなされませいなァ。

　ト祇園囃子になり、松若先に、櫻姫を突きやり〳〵、皆々石壇へ入る。隅田平思ひ入れあつて

隅田　かねて岩藤さまのお望みの通り、マァあれで色事の過りの上に、御朱印の越度。これからは、この草履。

ト以前の金剛草履を出し

佛足守護の金剛草履と名を付けて、花子さまが坊主になれば、これを穿かせ、色に迷へば越度となる。よし〳〵。

ト思ひ入れあつて御朱印の箱を取上げ、金剛草履と兩手に持ち

その上にて御朱印の箱の中へ、金剛草履を入れて置けば、盗賊は花子の前で、過りは櫻姫、姉妹一緒に罪に取つて落すは、上々吉の分別、うまい〳〵。

ト思ひ入れ。ゴンと時の鐘鳴る。隅田平悧りして

措きやァがれ。時の鐘といふやつサ。

トチョン〳〵音樂になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、竹のふし欄間、御簾一面に上げおろし。見附金張り附佛殿。爰に繪馬かけてある。平舞臺、下の方、杉戸口出入り、爰に奥女中大勢、各自角盥、湯つぎ、手拭を掛け、





腰元、みだれ箱、鼻紙臺、何れも蒔繪にて、これを持ち、立ちかゝり居る。音樂にて道具とまる。

關屋　最早放參の鐘に間もござんすまいから

都　此やうに花子さま御剃髪のお支度を

皆々　急ぎますわいなァ。

ト唄になり、向うよりお初、着流しにて、袱紗包みを持ち出で來て

はつ　どなた様も、これにお出で遊ばされましたか。

ト築地、七浦、ちろりと見て知らぬ振り。

築地　花子さまの御用が後れる。早う行かしやんせ。

トわざとお初の方へ寄り、行かうとする。

はつ　アヽモシ、ちとお頼み申し上げまする。

ト七浦築地野の袖を控へる。

築地　エヽ、忙しいわいの。

トお初を突き退ける。

女皆　こなさんは尾上さまの女中衆。

はつ　ハイ、初でござりまする。
築地　その初なら、お姫様の御用の邪魔せにやならぬか。
七浦　これも大方、尾上どのゝ云ひつけであらう。
四人　さうぢやあらうがの〳〵。
はつ　イエ、どう致して。マア、お邪魔は致しませぬ。どうぞ主人の尾上へ
四人　エヽ、知らぬわいなう。
ト　お初を突き廻す。お初迷惑がりし思ひ入れ。
はつ　ハイ、どうぞお願ひ申し上げます。
霧島　部屋方者なら部屋方のやうに、お留守を大事にせねばならぬ身で、お姫さまのお出で先。
柏木　この清水へは何しにおぢやつた。
はつ　ハイ、主人尾上が大切に致しまする九重のお守り、それを忘れられましたゆゑ、心がゝりでござりませうと、それゆゑ持つて參りました。關屋さま、どうぞお屆けなされて下さりませ。
ト守りを出して渡す。關屋受取り
關屋　そのお守りは、わしが屆けて上げませうわいなう。



築地　ハアヽ、そんならこりや、わたしどもが取次いでは、盗まれでもせうと思うて居るか。さう聞けば此方では知らぬ。
霧島　さうしてマア、わがみ達の來る所でもない所へ來て、何ぢや。
四人　立ちや〳〵。立ちやらぬか。慮外者めが。
はつ　ハイ。
呼び　御剃髪の刻限。
ト呼ぶ。
ト下の方の杉戸へお初入る。奥にて
四人　ほんに部屋方者は、物知らずぢやわいなア。
ト琴唄になり、下の方より岩藤、三寶に紫の法衣、錦の袈裟を載せて持ち、尾上引添ひ出て來る。此うち御簾一面に上がる。結構なる衾の上に花子、櫻姫と並び居る。皆々平伏する。
岩藤　只今阿闍梨樣よりも私しを召され、七條のお袈裟に紫法衣、花子さまへ贈り參らせ、未の下刻は放參にて、鐘もろともに御剃髪、何かの御用意ある樣にと、仰せ渡されにござりまする。
ト花子の前へ直す。花子取つて戴く。

女皆　すりや、どうあつても
花子　法の門出が嬉しいわいなア。
　　ト皆々じつとなる。花子懐より以前の袷姿を出し
思へばお果て遊ばされし、松若さまの此お姿袷、殿御の菩提に今日の剃髪。
　　トまた最前の都鳥の一巻を出し
殊に最前この一巻、三悪道に迷ひ給ひし物語りに、佛に仕へ、このお姿袷に回向して追善供養。尾上、近う。
尾上　ハア。
　　ト合ひ方になり、尾上、花子が側へ行く。
花子　この都鳥の一巻は、申さば松若さまのお形見なれば、大切にして、吉田家の菩提所へ納めてたもひなう。
　　ト一巻を渡す。待乳取つて三方に載せ尾上へ渡す。岩藤これを見て思ひ入れ。
尾上　お形見とあれば大切なる一巻。尾上にお預け下されまする段、冥加に叶ひ、有り難う存じまする。
　　ト岩藤むつとする。



岩藤　尾上どのは、果報者ぢやわいなう。
尾上　エ。
　　ト思ひ入れ。岩藤前に出て
岩藤　たとへ花子さまが其お形見を、お預けあらうとも、先づ一旦辭退して、岩藤どのへと申し上げられさうなものぢやぞえ。御首尾の好いをかさに被て、局役の私しを差措き、何ぢやゝら、當時お氣に入りの尾上どのでなければならぬやうに、局役は、有つても無うても事ぢや。隨分と御前よろしく、お勤めなさるゝがようござりまする。
尾上　イエ〳〵、無調法な私しに、何事に依らずお指圖を
岩藤　なんの、そもじの樣に發明で、この岩藤が指圖を受けられさうなものかいなア。尾上どのは歷きとした、親御はしかも本町で名高い町人、塚本屋佐五右衛門とやらいふ、お表の御用を勤めて身上よし。その金持ち顏が鼻の先へ、ぶらり〳〵ぶら付いて居る、その顏に見えるわいの。なんぼ金持ちの娘でも、お役向きは御中老、この岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通りの事は勿論、萬一狼藉者が切り入るか、又は盗賊などが御寢所近う入るまいものでもない。その時は役柄ぢやに依つて、女ながらも御前を固め、討取る器量が無ければならぬ御奉公ぢやが、尾

上どの、定めし長刀の一手も、心得てござらうがの。

尾上　ハイ、その儀は。

岩藤　誰れに稽古なされた。お發明ぢやに依つて、お嗜みがあらう。どなたのお弟子でござります。

尾上　サア、その御指南を受けましたは

　トつかへる。

岩藤　先生はどなたえ。御流儀はえ。眞影流か、但し眞刀流かえ。これいなう、人にばつかり物云はせ、挨拶せぬのは、アノ、武藝に心掛けは無いのかえ。イヤ、ほんに厚かましい者があるものぢや。コレ、その職に居て、その道を知らぬは、祿盗人ぢや。

　トきつと云ふ。尾上むつとする。

アノ知行盗人と云ふわいなう。盗人々々、イヨ、盗人さまめ。サア、斯う云はれるが口惜しくば、今この所で、岩藤と立合つて御覽じやれ。

　トまくしかけて云ふ。尾上思ひ入れあつて、ぢつと俯向く。皆々思ひ入れ。

關屋　イヤ、お二方樣の御前、十種香などのお慰みならよろしうござりませうが、殊に只今佛門にお入り遊ばさるゝ折なれば、武藝の試合ひは

市川団十郎
豊国画

トこの時御簾半ば下りる。

譬はゞ御簾のお透き見でも何とやら。

トこの時下の方の杉戸を明け、お初出かゝり窺ひ居る。

岩藤　イヤ、苦しうござらぬ。この經殿に安置あるは、田村堂の觀音さま、大悲の利劍、千本の矢先と同佛でも、弓矢、木太刀の繪馬の奉納物、御寶前での武の試み、尾上どの、立合はずば、御中老の役目が濟むまいがの。

七浦　尾上さまのお相手なら、世間晴れて御前にて、一番勝負して見たい。

築地　私しはこれでも、岩藤さまの一番弟子、劍術柔術の大達人、嘘をつきぢでない事よ。

柏木　いつぞは本まに汗かいて、どうぞ相手になりたうて、何處も彼處もむづ〳〵と、毛槍すやりの早業早速。

霧島　長刀ならばわたしが得手物、仕事上手で相手には、嫌ひは無き達者もの。

四人　サア、立合うて御覽じませ。

尾上　サア、それは。

四人　どうぢやぞいなァ……エヽ、爰へ出やしやんせ。

　　ト引ッ立てにかゝる。お初さつと前へ出て

はつ　憚りながら、マア／＼お待ち下さりませう。

尾上　ヤア、其方は初ぢやないか。

はつ　ハイ、左様でござりまする。

尾上　これはしたり、わがみ達の參る所ではない。殊にお二方さまの御前ぢや。下がりや。

はつ　ハイ／＼。

尾上　早く下がらぬか。

　　ト思ひ入れにて云ふ。お初おづ／＼立上がり、花道へかゝる。

岩藤　コリヤ、待て／＼。

　　トこれにてお初花道にとゞまり平伏する。

そちや尾上の召仕ひ初ではないか……部屋方者の身を以て、何しに來たのぢや。コリヤヤイ、お二方さまのお目通りへ、誰れが許して出たのぢや。慮外者めが。下がらぬか。

はつ　ハイ、誰れも許しは致しませぬが、ちとお願ひがござりまして、それゆゑ無禮慮外も顧ず、これへ出ましてござりまする。



岩藤　そりや誰れに願ひに。

はつ　あなた様に。

岩藤　ヤ。

はつ　只今あれにて承りますれば、主人尾上を相手に、立合ひとやらんを、御覽なされたいとのお望み。御存じの通り尾上ことは、町人の娘ではござりますれど、お宮仕へを致しますれば、少しはその心がけがござりまする。召仕ひの私しへも、小太刀の一手位ゐは、教へ置きましてござりまする。その名代と申しまするも、恐れ多い事でござりまするが、私しをお相手に遊ばされますれば、尾上が手練も知れませうかと存じますれば、憚りながら、お相手になされて下されませうならば、有り難う存じまする。

　　ト思ひ入れある。尾上もこなし。

岩藤　アノ、部屋方者の其方へ、尾上が

はつ　長刀の一手も、教へ置きましてござりまする。

岩藤　ムウ。

　　ト思ひ入れ。

築地　イヤ、岩藤さま、折角の願ひ、叩き据ゑて遣はされませ。
岩藤　こりやさう致さう、コレ初、心根が不便ぢや。其方が願ひ聞き届けた。叶へてやらう。
はつ　ナニ、お叶へなされて下さりまするか。
岩藤　イヤ、岩藤が相手はならぬ。相手にはわしが弟子。アノ霧島、コレ、大儀ながら打据ゑてやれ。
霧島　畏りました……コレ、初や、其方は身を知らぬ者ぢやぞいの。
はつ　これは何方かと存じましたら、有り難う存じまする。
霧島　今に足腰の立たぬやうになるのを、有り難いとは笑止やな。
關屋　コレ、初、お二方さまの御前といひ、有り難いこの場の立合ひ、随分共に心を付けて……サ、こ
れへ、これへ。

ト お初思ひ入れ。

はつ　ハツ。

トもぢ〳〵思ひ入れ。

關屋　ハテ、何にも遠慮には及ばぬ。お局さまのお指圖といひ、サヽ、早く〳〵。

ト お初思ひ入れあつて立上がり、本舞臺の方へ抑へる。



柏尾　幸ひ〳〵、觀音樣へ御奉納の繪馬の竹刀を。

ト二重舞臺へ上がり、繪馬を取つて竹刀を眞中へ直す。

岩藤　双方ともに、支度しや。
初霧　畏りました。

ト白囃子になり、兩人支度あり、二重舞臺へ式して竹刀を取上げ、色々立廻りあつて、お初、霧島をしたゝかに打つ。七浦、柏尾、築地野かゝるを、立廻りあつて散々に打据ゑる。尾上こなし。お初一人づゝ塵を拂ふ。四人お初を睨みつけ

四人　よう酷い目にあはしやつたなう。
はつ　御免なされて下さりませ。

ト思ひ入れあつて行かうとするを

岩藤　コレ、待ちや。
はつ　御用でござりまするか。
岩藤　其方の手の内、あんまり見事ぢやに依つて、わしが相手になつてやらう。
はつ　勿體ない、どうしてあなた樣と。

岩藤　そんなら尾上と立合はうか。

はつ　サアそれは。

岩藤　サア

はつ　サア〳〵

岩藤　何とぢや。

はつ　ハイ、それ程までに仰しやりまする事なれば、憚りながらお相手に。

岩藤　すりや、立合ふか。

はつ　畏りましてござります。

岩藤　サ、支度しや。

はつ　ハツ。

ト白囃子になり、四人手傳ひ、岩藤支度する。合ひ方、眞中へ出て

岩藤　初は仕合せ者ぢや。

ト突然に打つてかゝる。お初手早く竹刀を持つて受留め、立廻り、兩人きつと見得。これより三味線入りの白囃子になり、立廻りよろしく





はつ　これではお相手になられませうか。

岩藤　なか〳〵味をやるわいの……ところを斫うして。

ト矢張り右の鳴り物にて又立廻り。

はつ　これでは如何ござりませう。

岩藤　オヽ、出かす〳〵。ところを

ト身を躱して打つてかゝる立廻り。トヾお初、岩藤の小手をしたゝかに打つ。岩藤「ウム」となる。お初直ぐに竹刀を打落さうとして、思ひ入れあつて、岩藤が持つたる竹刀をそつと取り、これを持つて立ちかゝる。敵役四人立ちかゝる。尾上「コレ」と思ひ入れ。お初こなしあつて右の竹刀をば岩藤が前へ置き、下がらうとする。この時岩藤心付き、竹刀を取つてお初を散々に打つ。

岩藤が手練の早速、なんと骨身に徹へたか。

はつ　イエ〳〵、そりや御卑怯でござりまする。先を取つたる私しの勝、御遠慮いたして扣へたを、騙し打ちに。

岩藤　默れ〳〵、默り居らう。口强情にこの場の云ひ譯。互ひに武藝を顯す立合ひ、なんの遠慮も會釋もいらぬ。わがみ勝なら、なぜ私を打たぬのじや。心根が不便さにあしらうて居たを、誠と心

得付け入る無禮。打据ゑたは以後の見せしめ。その未熟の手の內、お相手なぞとはすさまじい。それで尾上が手練も知れた。もう四五年も稽古しや。どうしてわしに齒が立つものか。ホヽヽヽ。

はつ　慮外か未熟か、あなたの竹刀を打落しました上からは。

ト立ちかゝるを、尾上、つか〳〵と行き、扇にて打据ゑ

尾上　慮外者めが。お二方さまの御前といひ、あなたをどなたぢやと思ふ。お局さまぢやぞ……お歷々の中で、よもや〳〵と思うたに、物の見事に

ト嬉しきこなし。これを隱して

サア、見事あなたのお相手にならうと思ふか。無禮者。

はつ　御免なされて下さりませ。

ト思ひ入れ。

櫻姬　末の者には似合はぬ、初とやらが手の內。尾上、目を懸けてやりやいなう。

尾上　有り難う存じまする。岩藤さま、さぞお腹も立ちませうが、何を申すも、賤しい者でござりますれば、御料簡なされて下さりませ。

岩藤　何のいなア、みんな此方が惡いゆゑ、お詫びには及びませぬ。



ト云ふ。尾上思ひ入れあつて

尾上　アレ、岩藤さまのお詞を聞いたか。必ず詫びるに及ばぬとの事。其方が身に取つては、有り難い事ぢやに依つて、これに付けてもお上の御恩を忘れぬやうに、御奉公大事に致せ。お免しあらば身の喜び、早うお次へ立ちや。

はつ　エヽ、有り難う存じまする。

トお初思ひ入れあつて杉戶の內へ入る。放參の鐘鳴る。

岩藤　ありや放參の鐘。

ト音樂になる。上の御簾卷上げる。花子坐り居る。下座より新淸水の住僧轟坊、黃衣の形にて、水晶の珠數と柄香爐を持ち、跡より腰衣の同宿二人、香合を持ち出て來て

轟　花子の前には、かねて佛門に歸衣あつて、佛の御弟子となられたれば、只今より受戒の身。

僧一　佛說是普門品時。

僧二　衣中八萬四千衆生。

僧一　開發無等々。

兩人　阿耨多羅三藐三菩提心。

花子　思ひ廻せばたらちねの

櫻姫　かゝれとてしも烏羽玉の

花子　我が黒髪の撫でずやあらん。

轟　五重三脉五戒を保てば、即ち法名は清玄比丘尼。

皆々　すりや、清水の清玄さまとや。

轟　放参の鐘を違はず剃髪あつて、一切衆生陀羅尼を唱へ、佛に仕ふる身となれば、中門の内の水は、都清水の寫し、一切功德に勝りたる清水、それへ参つて水を汲まれよ。

ト この時下の方より隅田平、以前の金剛草履を持ち出て來る。

隅田　清玄さまには、阿闍梨さまよりお授けあつて、佛足守護の金剛草履を、差上げまするでござりませう。

轟　瑠璃金色の法の道は、その佛足にて歩みを運び、阿伽の水汲み花摘みて、觀音薩陀へ献げられよ。なを佛足なれば佛間より。

隅田　これまで拙者も姫君の、お草履摑みし下部が名殘。せめてはこれなる佛足も、直し申して身の功德。皆々さま、御免下さりませう。



櫻姫　すりや、姉上さま。

ト 同宿草履を受取る。此うち、轟坊二重舞臺へ上がる、皆々剃刀の盥を直す。

轟　清玄尼には、はや佛名。

ト 岩藤思ひ入れ。

岩藤　鐘の響ともろともに、あたら柳の黒髪を

尾上　おろし給ふと思へば、胸が張裂く程

皆々　櫻姫さま。

櫻姫　皆の者。

皆々　おいとしうござりますわいの。

ト 花子思ひ入れ、合掌して

花子　南無大慈大悲の觀世音菩薩。

皆々　南無阿彌陀佛。

ト 憂ひのこなし。唄になり、御簾一面に下りる。隅田平下の方へ入る。皆々思ひ入れあつて、岩藤、尾上、辭儀して入る。このうち下の杉戸よりお初出て、思ひ入れあつて

はつ　ほんにマア、おいたはしいは姫君さま、花の莟みのお姿を、お變へなされて尼法師。下々であらうならば、お十九やそこらでは何のマア、後生どころか。上々さまのお心は、また格別なものぢやわいの。御殊勝な姫君さまに引替へて、お局さまの意地の惡さとした事が、お心好しの旦那さまを捉へて、云ひたいがい。そしてマア、いま竹刀打ちにもわたしが勝つたを、何ぢやの彼ぢやのと無理云うて、したゝかに叩きくさつて……これがほんの、くぼい所へ水とやら、腹が立つても仕樣はなし。アヽまゝよ。わしはどのやうになつても、旦那さまに何事も無ければよいといふものぢや。斯ういふ內、もう御歸館に間もあるまい。ドリヤ、お先へ行て、お歸りを待ちませうか。

ト唄になり、お初花道へかゝり、思ひ入れ。双盤になり、向うへ入る。矢張り双盤にて道具廻る。

本舞臺、一面に元の淸水の道具。上の方に假番屋、幕張つてあり、下の方石の井戸「ふくらう水」といふ建て札。眞中に合羽箱、次に挾み箱、その上に櫻姫腰掛け、煙草のんで居る。關屋莨盆を差出して居る。侍女二人附添ひ、隅田平心を配つて居る。三味線入りの禪のツトメにて道具とまる。

櫻姬　常陸之助さまはまだかや。

關屋　待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うたもの。

綾瀨　もうお出でなされさうなものぢやなア。

隅田　エヽヽ　こぢれつたい。おれなれば疾うに來て、ツイ、ちよん〱の花見まで、露に濡るゝであらうのに。ドレ、ちよつとお迎ひに行つて來よう。

ト下座の方へ行く。思ひ入れにて

ヤアヽ、ござつたぞ〱。モシ、櫻姫さま、常陸之助さまがござつた〱。節季候ぢやない、せき切つて此方は待ちかね。皆下に居ろ〱。

ト女形皆々下に居り

綾瀨　ハイ〱。

ト辭儀をして

關屋　隅田平どの、戀のお取持ちに此やうに、お辭儀してゐては、埒が明くまいぞえ。

隅田　成る程、こりやお辭儀なしに、据ゑ膳を食はつしやるがよい。

ト鎌助走り來て

鎌助　モシ〱、おらがお旦那、ござつたぞ〱。

隅田　常陸之助さまには、早くこれへござれや。此方は、せきぞろ〱。

ト立騷ぐ。松若丸出て來て

松若　櫻姫どのには、これにござつたか。

隅田　あなたのお出でを、大抵此方はせきぞろで

關屋　お待ちかね申した事ぢやござりませぬ。

松若　承れば花子どのには、もはや御剃髪も相濟むとござるが、定めて櫻姫どのにも、安堵いたされて
ござらう。

櫻姫　姉上さまの事を思へば、ほんにおいとしう存じまするわいなア。

關屋　申し、櫻姫さま、其やうな事を思し召しますと、何や彼やのお心がゝり。そんな時にはお氣晴ら
しに

綾瀬　煙草は辛苦を忘れ草と申しますれば

關屋　あなたからお吸つけ遊ばされまして。

櫻姫　吸ひつけて如何するのぢや。

隅田　成る程、お姫さまが吸つけ煙草を御存じなきは御尤も。こちとらが樣に、ずどんと放した鐵砲見世、
煙草しめれば三々九度、やう〳〵に吸ひ付たのを、呑むと其まゝちぎりきな、路地の鐵棒音にび



つくり、歸りがけに又一服と、別れの煙草。うまい契りを煙草でばつかり、濟む身の上と、あな
たがたとは、同一にはならぬ筈。

鎌助　どうで命を限りといふ、うまいところへ、もう路地は締りますと、云はれるこちとらとは、お月
樣とすつぽん程、違ふ思ひでぢれつたい。

關屋　ほんに辛氣な事でござりますわいなア。

櫻姫　それ〳〵、煙草は辛苦を忘れ草と申しますれば

ト煙草のんで居る。

鎌助　モシ、旦那、あのお煙管を。

ト取つてのめといふこなし。

松若　その辛苦晴らしに某にも、ドレ一服。

ト合羽箱に腰を掛け、櫻姫の煙管を取つて煙草をのむ。

櫻姫　これは憚りでござりまする。

松若　未だ某降參の一埒、願ひの儀相濟まねば、表立たぬ事ながら、侍女腰元の志しにて

淺茅　善は急げ、惡は延べいと申す事もござりますれば、丁度只今何や彼やの御首尾。

綾瀨　客殿や庫裡では、人目があつて惡うござりますから、ちよつと最前わたしが見て置きました、氣の付かぬこの番屋。

松若　すりや、誰れ憚らず

櫻姬　御婚禮のその前に。

女皆　こりや內證の御婚禮。

櫻姬　ホヽヽヽ。

ト恥かしきこなし。此うち下座より花子、帽子紫衣、錦の袈裟の形にて、水晶の珠數を持ち、樒の入りたる花手桶を持ち、右の金剛草履を穿き、同宿二人、女中侍女四人附添ひ出て來る。

櫻姬　久方の長閑けき春の今日よりも、お慕ひ申せし姉上さまに、あはれ暫しは別れしも、飾りをおろし給ひしより、明行く雲は紫の

花子　三衣のあかつき眞如の月、眺むる心の身となりしは

同宿　世を觀念の衆生濟度。

花子　觀音さまへ奉る、阿伽の水汲み花摘みに

ト下の井戸の方へ行く。



關屋　この井のもとへお手づから、お出でなさるゝ御有樣。

隅田　思へば吹雪の櫻と共に

都　散り行く花の

皆々　お姿でござりまするわいなア

トこの時花子、松若丸をちよつと見て、心得ぬこなしにて

花子　それにお出でなさるゝお方は。

櫻姬　あなたは。

ト恥かしきこなし。

關屋　櫻姬さまのお云ひ號けの、常陸之助さまでござりまする。

花子　エ。

ト思ひ入れ。

これはお初にお目にかゝりまする。

松若　さては、こなたが櫻姬どのゝ姉上、花子の前。承れば今日御剃髮あつて淸玄尼どの、某、妹御とは云ひ號けの名はあれど、未だ婚姻濟まねば、兄妹とも申されず。併し俗緣を離るれば、こなた

には身一つ。

ト花子をよく見て

ハテ、變つた折に對面いたしまする。

ト花子じつと思案する。

花子　そんならあなたが。

ト思ひ入れ、誂への竹笛の合ひ方になる。

妹が云ひ號けの、常陸之助さまでござりましたか。

松若　いかにも。

ト思ひ入れにて

ハテ、美しい。

トこなし。花子もぎつくり思ひ入れあつて、松若の顔をじつと見る。

同宿　モシ、阿伽のお水を。

ト花子心付き花手桶を差出す。同宿、繩釣瓶にて井戸より水を汲み、花手桶へあける。此うち花子、懐より以前の繪姿を出し、松若を見て、寸分違はぬといふこなし、大きに驚き





花子　ハテ、よう似たる

松若　ヤ。

ト思ひ入れ。

同宿　ハイ、お水を汲みましてござります。

ト花手桶を差出す。花子繪姿を懐へ入れ、花手桶を持つて思ひ入れあつて、再び顔を見ながら、じりじりとつけ廻し、花子上の方へ行く。珠數にてあたりを拂ひ、目を瞑り

花子　南無大慈大悲の觀世音菩薩。

ト云ひながら思ひ入れあつて目を明く。また松若と顔見合せ、思はず花手桶を取落す。バラ〳〵と毀れる。皆々驚く。花子ツイと下座へ入る。

女皆　何の事ぢや。

ト都、淺茅續いて入る。

鎌助　何だか、ねつから解らねえ。桶を落して水がこぼれると、ばた〳〵〳〵。

隅田　成る程、おぬしが云ふ通り、水こぼれると、ばた〳〵と行かしやれたが

ト花子の眞似をして

あれではどうやら、狂人の水こぼし。

松若　ハテ、合點の行かぬ。

櫻姫　姉上さまには、如何遊ばされたか。

關綾　私しどもには、とんと解りませぬ。

ト松若思ひ入れあつて

松若　何は格別、櫻姫どの、枕かはしたその上にて

櫻姫　誓ひの約束御朱印を

松若　それも暫くあの番屋で

ト櫻姫、松若上の番屋へ入る。ト唄になり番屋の幕を卸す。皆々下座へ入る。隅田平殘る。下座より同宿、花子の金剛草履を持ち來り

同宿　清玄さまには、觀音堂へお入りあつて、香花を献げ、普門品を讀誦あれば、この佛足をお草履取りのこなさまへ。

隅田　すりや、このお草履を

同宿　慥かに渡しましたぞや。

ト同宿下座へ入る。三味線入りの禪のツトメになり、隅田平思ひ入れあつて、最前の箱を出し、草履片足を中へ入れ、片足を投げやり

隅田　斯うして摺りかへて、清水堂の御寶前へ入れて置けば

ト云はうとして

うまい〳〵。

ト思ひ入れあつて下座へ行かうとする。下座より尾上出て來るゆゑ、隅田平下の方へ入る。番屋の内より松若、櫻姫出て來て身形を直し居る。此うち尾上出て來り、在合ふ手桶の水を柄杓にて汲み、水をかける。三人こなしあつて

尾上　これは常陸之助賴國さま。

松若　尾上どの。

三人　ホヽヽヽ。

ト笑ふ。

櫻姫　オヽ、恥かし。

尾上　モシ、岩藤どのゝ目にかゝつては大事でござりまする。必ずともに

松若　人目の恐れ。
尾上　人目千本吉野にあらねど
松若　サ、その櫻は我が花と
尾上　やがて眞の御婚禮。
松若　誓ひのしるしを
櫻姫　後程きつと。
尾上　エ。
松若　忘れてたもるなよ。
櫻姫　嬉しうござんす。
尾上　あの嬉しさうなお顔わいの。
　　ト唄になり、松若扇遣ひして下座へ入る。このうち下座より惣太窺ひ出て
惣太　コレ、お中老さま、都鳥の一卷を取上げて、褒美も寄越さず、どうするつもりだよ。
尾上　褒美は追つての沙汰に及ぶ。
惣太　イヤ、呆れるワ。



櫻姫　姉上さまの大切に思し召す一卷、違はぬといふしるしはこれ。
　　ト懐より最前の短冊を出す。尾上取つて
尾上　これを割符に。
　　ト惣太取つて
惣太　これをしるしに褒美をしつかり。
　　ト懐へ入れて。
イヤ、こんな緩慢い事ぢやァ否だ。爰で直ぐさま褒美の金を。
尾上　ハテ、聞分けの無い。
惣太　その一卷を、大方こなたが。
　　ト尾上の懐へ手を入れる。
尾上　こりや理不盡な。
　　ト振り拂ひ
松若さまのお形見とあるゆゑ、滅多には返されぬ。褒美を取らす。
惣太　褒美もいらない。面倒なその一卷を

トまた尾上の懐へかゝる。都鳥の一巻を出す。立廻りの内後より隅田平出て來て

隅田　こりや、何とするのぢや。

櫻姫　尾上へ慮外いたす下部。

隅田　その一巻を

　ト惣太を突廻し、一巻を取る。

惣太　それをやつては。

　ト取らうとするを突倒し、双盤になり、隅田平一巻を持ち、向うへ、惣太跡を追駈けて入る。

尾上　今の下部が一巻なれば、松若さまのお形見といひ、預かり申したれば大切。併し隅田平が追かけ行たれば、氣遣ひはあるまい。櫻姫さまにお怪我あれば大事。まづ／＼。

　ト櫻姫、尾上下座へ入る。時の鐘、合ひ方になり、下座より戸田平、頬冠りにて出て來る。堂の上に清水清玄窺ひ出て來り

戸田　人目の無きを幸ひに、清水の内陣より、繪馬堂へ忍び込み

清玄　戀の叶はぬ意趣ばらしに、奪ひ取つたる寶の箱。

戸田　まんまと首尾好く

清玄　御朱印を。

　ト清玄、箱の蓋を明けて見て、愕りし

ヤア、こりや御朱印ならぬ鯉魚の一軸。

　ト此うち戸田平、寶箱の蓋を明けて

戸田　こりやコレ、寶は無くて草履の片し。

清玄　ムウ、闇に紛れ取違へたか。

兩人　エヽ、いま／＼しい。

　ト戸田平、清玄と顔見合せ

戸田　あなたはお旦那。

清玄　そちや戸田平。

戸田　すりや、最前の様子を

清玄　殘らずこれにて承つた。

戸田　イヤ、無駄骨を折りました。

清玄　イヤ、無駄骨でない。身共が鯉魚の一軸も、櫻姫に渡してあれば、明日の内見をしくじらすは、

幸ひ〳〵。

ト あたりを見て、以前の金剛草履の片しを取上げ

この箱の中へ金剛草履を入れて

ト箱より一軸を出し、中へ草履を入れる。

一軸が紛失にて詮義になれば、盗んだ奴は草履の主。

ト一軸を投げやる。

戸田 こりや出來ました。斯うして置けば御朱印も、一軸も盗賊は草履の主。併しこの鯉魚の一軸を

ト一軸を取上げる。

清玄 大事ない。斯ういふ事もあらうかと、拵へ參つた一軸は似せ物。この上は、蓋箱ともに、密かに忍んで內陣へ。

戸田 心得ました。

ト一軸と二つの箱を懐へ入れる。向う、ばた〳〵とする。

見咎められては一大事。

清玄 して、櫻姫を引ッ拂ふは。





戸田 モシ。

ト囁く。

清玄 すりや、入間の屋敷へ忍び込み

戸田 幸ひの合羽籠。

ト合羽籠を明け、中へ清玄を入れる。元庵出て

元庵 こりや此方の合羽籠。

トかゝる。戸田平驚き

戸田 こりやアやらぬ。

ト元庵を引退ける。「それを」とかゝる立廻り。

幸ひな片荷の重り、此奴を入れて入間の屋敷へ。さうだ。

ト元庵を三尺手拭にて引縛り、合羽籠へ入れ、やう〳〵擔ぎ上げ

こいつは重いワ〳〵。

ト太鼓入りの双盤にて戸田平下座へ入る。向う、ばた〳〵にて隅田平、一巻を持ち、惣太追ひ駈け出て來て引ッ捉へ

惣太　駄折助め。うなア太い奴だぞえ。骨を折らした金剛草履の代も寄越さず、又その上に都鳥の一卷まで締めこの兎とは、土船もどきの泥坊野郎め。さうはならない。

隅田　樣子を聞けば、この一卷で吉田の殘黨集まる品。おれも入用だ。うぬに渡して堪るものか。

惣太　さう云や、うぬを。

ト一卷を取らうとする。双盤になり、兩人一卷を枷に立廻り、よろしくひやうし　**幕**
し時の鐘にてツナギ。引返し早幕。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、眞中に九尺の亭屋體、丸柱、本緣側、奇麗なる葭すだれ。舞臺前、花道とも一面に流れ澤山に、白萩の花盛り。よき所に竹床几を直し、月出てあり、螢すさまじく飛びかふ。すべて近江の國、野路の玉川の體。大ドロ／＼にて幕明く。

トどろ／＼打あげる。獨吟になり、向うより松若、右の形を墨繪にしたる衣裳の心にて、庭下駄を穿き、蟲籠と銀の團扇を持ち出て來て、花道にて

松若　あすも來ん、野路の玉川萩こえて、色なる浪に月宿りけると、その近江路の玉川は、鄙びたる所と聞きたるが、この白萩の花盛りといひ、風雅の東屋、月の宿りに螢の風情。ハテ、憎からぬ眺めぢやなア。

ト螢を追うてゐる。また獨吟になり、簾上がると、內に花子、さけ毛のそぎ尼、紫衣の形を墨繪にしたる心の衣裳にて、經机を前に置き、經卷を持ち、讀誦してゐる。

花子　妙法蓮華經、觀世音菩薩。

ト雨車になり、月、雲に隱れる。松若、螢を拂ひながら

松若　これはしたり、雨がほろついて來た。

ト云ひ／＼本舞臺へ來て

この野路の玉川に、珍らしい風雅の庵、主は尼御前。アヽ聞えた。月の明り、螢の光りで經文を

花子　邪魔なされて下さりまするな……普門品第二十五……

ト構はずにゐる。

松若　染衣の身にはきつい慳貪。殊に雨がほろついて參つたれば、暫らく雨宿りを

花子　アレ、また矢ッぱり妨げを

ト一心に讀誦してゐる。松若、花子をよく／＼見て

松若　これサ、御經讀誦の邪魔は致さぬ。して、こな樣は

花子　今日剃髪いたしました、清水の清玄尼と申します者でござりまする……念誦観音力。

　　トあち向いて經讀んでゐる。松若驚き

松若　その清玄尼どのなれば、俗の名は花子の前……某はこなたと云ひ號けの、吉田の松若丸ぢやわいの。

花子　エヽ。

　　ト恟りして思ひ入れ。矢張り見向きもせず

何をマア。松若さまはお行くへ知れず。お果てなされてそれゆゑに、自らがこの剃髪。

松若　疑ひ深い。この松若を死んだとは

花子　人を惑はす障化の業。エヽ、穢らはしい。

　　ト構はず平舞臺へ下り、上の方にて空を見て

雲も晴れたる眞如の月。南無大慈大悲観世音菩薩。

松若　さてもつれない。三衣に似合はぬ

　　ト思ひ入れあつて、同じく下り來て



この盛りなる萩を眺めて、妹脊はなれず飛びかふ蜻蛉、それを捕へてこの蟲籠へ。これでも見さつしやれて、ちと氣晴らしをなさるがよい。

花子　ナニ、秋津蟲を蟲籠へ。エヽ、殺生な

　　ト合掌して

南無大慈大悲観世音菩薩。重罪五逆消滅自他平等即身成佛。

松若　この松若とは、云ひ號けでありながら、獨り即身成佛して、某を無間地獄へ落すのか。

花子　エヽ。

　　ト經卷を持つて逃げようとする。松若、經の端を引ッ張る。花子驚き「アレ」と思ひ入れ。

松若　それ、經卷が破れるわいの。

　　ト經を枷に花子を無理に引寄せ

ともに成佛させて下されい。

　　ト思ひ入れ。チリ〳〵の合ひ方になり、下座より櫻ン坊、腰衣の同宿にて、大きな八丁笠をかぶり、安下駄を穿き、茶碗とちろりを持ち、合ひ方に合せ、一寸法師のやうにして出て來る。兩人見て

最早雨は上がつたに、八丁笠の酒貰ひ。慥かに狸。

花子　エヽ。

ト愕りして立上がる。

櫻坊　愕りさつしやりまするな。愚僧ぢや〳〵、櫻ン坊ぢや。

ト笠を取る。

花子　ヤア、こなさんは

櫻坊　お師匠様が清玄さまへ、お經で氣が盡きやうから、これを上げいとの云ひつけ。雨も隨分降るから、肴をうんらいくうせいてん、酒に醉つたら、それこそ念彼觀音力。

ト合ひ方になり、ちろりと茶碗を置いて、櫻ン坊こなしあつて下座へ入る。

松若　そんなら狸の化け物ではなうて、御酒一ちろり。さて〳〵粋な阿闍梨樣。

ト花子へこなし。

花子　所欲害身者念彼觀音力。

松若　コレ、其やうにひぞり切らずと

ト花子を捕ゆるを突きのけ

花子　エヽ、穢らはしい。



ト逃げるを、松若捕へてこなし。花子、松若を押退け、逃げようとして、よく〳〵見て、ヤツと思ひ入れ。ギツクリとなる。誂らへの合ひ方。

成る程、あなたはお姿繪の、松若さまによう似たお方。

松若　ハテ、云ひ號けの松若ぢやもの。

花子　妹櫻姫の聟におなりなされた、常陸之助さまの、お顏も矢ッ張り生寫し。

松若　ヤア。

花子　どちらが、どうやら

ト松若の手を取り、キツと思ひ入れ。

松若　すりや、染衣の身にて穢らはしいと云はれたが、俄に心の變つたは

花子　松若さまのお姿繪に、生寫しのあなたぢやもの。

松若　ハテ、その筈、誠の吉田松若丸。

花子　とはいへ、お果てなされし我が夫。

松若　その疑ひを、晴らすはコレ

ト赤地錦の袱紗を出す。花子、愕りして

花子　これをお持ち遊ばすからは
松若　たらちねの、云ひ號けせしその折に、我れへ送りし富田裂れ。
花子　エ。

ト思ひ入れ。

松若　その松若ぢやによつて、杯ごとをしようではないか。

ト茶碗を取上げて酒をつぐ。

花子　とはいへ一旦、佛に仕へし身にて
松若　今さら我れを

ト酒を飮みにかゝる。その手を押へ、持ちそへて、それなりに右の酒を一口飮む。松若こなしあつて、茶碗を取つてグツと飮む。花子、顏見て恥かしきこなしにて、衣の袖を顏へあてる。これをキツカケに又、獨吟になり、此うち松若、捨ぜりふにて、二重舞臺へ上がり、こなしあつて、机の上にある箱入りの經卷を取つてならべ、また舞臺へ下りて、花子の衣をとり、帶の先をとらへ、二重舞臺へ引上げる。花子思ひ入れあつて、兩人なまめかしきこなし。獨吟一ぱいにチョンと簾下りる。合ひ方になり、下座より櫻ン坊、硯蓋を持ち、窺ひ出て來て、右の肴を舞臺前へ置き、簾の內の樣子を窺ひ、思ひ入れあつて此方へ來る。此うち蜻蛉出て硯蓋の上へとまる。櫻ン坊、八丁笠にて押へようとする。よき時分、薄ドロになり、蛇出る。櫻ン坊、これに恐れ、逃げて入る。大ドロ〳〵にて、屋體の內より誂らへの魂ひ現はれ、日覆へ引上げる。道具バタ〳〵と變る。大ドロ〳〵にて、道具廻る。

本舞臺、眞中、右清水の舞臺を中程にして、高欄より上ばかり見せ、結構に仕立て、舞臺前、櫻の梢ばかり、東西とも凄まじく櫻の花盛り。爰に花子の淸玄尼、花の帽子、紫衣の形にて、高欄によりかゝり、眠りゐる。大ドロ〳〵にて道具とまる。

ト日覆より魂ひ下りて來て、花子の懷へ入る。煙硝火立つ。雨窓明るくなる。花子、目を覺まし

花子　ハテ、合點のゆかぬ。迷ひの心を拂はんと、この舞臺にて普門品を唱へるうち、ついトロ〳〵と現のやうに、所も變りて近江なる、野路の玉川、白萩の、花の盛りのその中にて、逢うたは焦れた松若さまと、破戒の身となり、妹脊の語らひ。

トあたりを見て

爰は矢ツ張り、新淸水の舞臺の櫻。そんなら妹の云ひ號けの、常陸之助さまが、松若さまのお姿繪に、よう似た似たと思ふ輪廻に、心が迷うて

トぢつとこなしあつて

さては今のは夢であつたか。エヽ、恥かしい。どうせうぞいの〳〵。

ト思ひ入れ。

心の曇りを晴らさんと、思ふに又も追ひくる煩惱、松若さまと初めて添臥しなした夢。とても生きてはゐられぬこの身。

トあたりを見廻し、繪馬に掛けてある紅葉笠を取つて

この清水の觀世音へ願ひをかけ、舞臺より飛び下りても、願望叶ふその時は、身に恙はなしといへど、それには變り、この清玄尼は、舞臺より飛び、身を捨てゝ、死んで未來をお頼み申さん。オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れ。

枯れたる木にも花の咲く、觀世音の導きにて、必ず未來を助け給へ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。

ト合掌して舞臺前の櫻の中へ飛び下りる。舞臺の上へ、バタ〳〵にて、隅田平、一卷を持ち、惣太出て引ツ捕へ



隅田　ハテ、うるさくも追ひ驅け廻るな。

惣太　知れた事、この一卷は、おれの物だワ。

隅田　ところをおれが、物にするのだ。

ト一卷を奪ひ合ふ立廻り。風の音になり、この一卷を日覆へ吹きあげる。兩人驚き

兩人　ヤア〳〵、一卷を深山颪に

惣太　これも、うぬゆゑ

トありあふ傘を取つて打つてかゝる。立廻り。この傘を下へ落す。兩人よろしく組み合ひ、キツと見得。誂らへ賑やかなる鳴り物になり、チヨン〳〵にて、この舞臺道具、一面にせり上げる。

本舞臺、元の清水の麓の道具になり、上の方へ音羽の瀧を押し出し、この舞臺の下に花子、前へ扇を落し、氣絶してゐる。側に松若、立ち身にて花子を見てゐる。この見得にて一面にせり上げ、道具とまる。

松若　最前より花の下にて樣子を見るに、覺悟とはいひながら、思ひ切つたる事いたして、清玄尼には氣絶の體。

ト落ちたる扇を取つて見て

この扇子の歌は、慥かに順德院の御宸筆。綸旨同然。ムウ。

ト扇を懷へ入れ、花子を介抱して

清玄尼どの〱……これ程介抱しても、心のつかぬは

ト當惑のこなし。しつぼりとした合ひ方になり、松若、瀧壺の水をすくひ、保たぬゆゑ口に含み來て、花子へ口うつしに飮ませ、介抱して

コレ、清玄尼どの。

ト呼び生ける。花子、心づき、松若を見て、悔りして

花子　ヤア、松若さま。

松若　ヤ……イヤ、常陸之助賴國でござる。

ト花子、松若をよく〱見て

花子　そんならアノ、死んで未來を助からんと思うたに

松若　介抱いたして音羽の瀧の

花子　水にて、つかへしこの咽喉が

松若　速かに通りたるも

花子　思へば心が

松若　附きましたか。

花子　あの瀧壺の

松若　冷水を

花子　賴國さまが

松若　口から口へ

花子　ナニ口うつしに

トぢつとなつて、思ひ入れあつて

死んで未來の松若さまにと、思ふに又も心を附けて下されたは、生寫しの常陸之助さま。すりや、どう思うても離れぬ輪廻。ア、死ぬるにも死なれぬかいなア。ハア、。

ト思ひ入れあつて「ウン」とのる。下座より櫻姬、女形皆々奧女中と共に出て來て、花子を見て驚き

皆々　清玄さまには、なんとなされました。

松若　世を思ひ切り、舞臺より、死ぬる覺悟で飛び下りての氣絕。介抱いたして心の附きしが、また此

皆々　やうに
清玄さま、お心が附きましたか。
　ト花子心附き
花子　アヽ、淺ましや。迷ふまいと心を定め、死んで未來を助からんと、舞臺より身を捨てしに、死ぬに死なれぬ、矢ッ張り因果。
　トこなしあつて
アヽ、思ひますまい〳〵。觀世音へ誓ひを立て、心がゝりの無いやうに、妹、杯事してたもひなう。
櫻姫　杯事、とはえ。
花子　其方と常陸之助さまと、三々九度の
松若　すりや、婚禮の
花子　めでたく爰で
關屋　幸ひ爰にお持たせなされた、さゝへがござりまする。
　トさゝへを出して




皆々　イザ、おめでたう
　ト三味線入り、禪のツトメになり、花子、思ひ切つたるこなしにて、上の方へ行く。此うち戸田平、合羽籠をかつぎ出て來り、清玄と共に窺ひゐる。さゝへより錫の德利、杯を出し、皆々櫻姫の前へ直し、關屋、以前の鳥籠を出し
關屋　まだお放しは遊ばさぬ、この鴛鴦は比翼のもの、島臺がはりに
七浦　なんと、斯うなされてはどうでござりませう。この妹脊の鳥を、島臺にして置かうより、したしみ深い鳥の血酒を。なう、築地野さん
築地　左樣でござりまする。何であらうと、お姫樣とお聟樣の、お仲の好いのが肝腎。私しどもなら蠑螺の黑燒で、斯う引ッついてゐたうござります。
　ト柏尾へ寄り添ふ。
柏尾　おきなさんせ。お前とわたしでは、和合神のやうで、額の寒山拾得だと申しませうぞえ。
築地　わたしを寒山拾得とは、アタ好かん。
霧島　鴛鴦は執心の深いもので、夫を慕ふこの鳥の血を飲むと、猶々妹脊離れず、したしみもあると申しますれば、御婚禮の御酒の中へ

ト云ひ〳〵、鴛鴦を笄にて突き殺し、徳利へ血汐を絞る。皆々驚き

**皆々** エヽ。

**關屋** これはしたり、霧島さん。その鴛鴦を殺さしやんしては、放生會のお妨げ。

**皆々** きつい殺生さしやんしたな。

**霧島** ほんにマア、心附かいで、ひよんな粗相いたしました。どう致さう〳〵。

ト花子驚き

**花子** ナニ、鴛鴦を殺せしとや。ても殺生な。南無大慈大悲の觀世音菩薩。

ト拜んでゐる。七浦キツとなり

**七浦** 霧島さんとしたことが、花子の前樣が御剃髪にて、放生會を遊ばさるゝ、その鴛鴦を殺さしやんしては濟まぬ。お局樣やお中老樣へ申し上げて、御遠慮申しつけねばならぬ。

**皆々** 御遠慮しや〳〵。

トわざと立騷ぐ。

**花子** ハテ、大事ない、立騷ぎやるな。

**三人** でも、放生會の、あの鴛鴦を



**花子** 生けるを放つその鳥を、誤まつての殺生は、無調法なれども、鳥の代りに奉公を、遠慮さするには及ばぬわいの。

**霧島** エヽ、有り難う存じまする。

**關屋** 併しながら、御婚禮のお固めには、至極よろしいこのお酒。

**皆々** 左樣なれば、御緣女樣から

ト櫻姬、杯を取上げる。關屋、酌して、櫻姬飲んで松若へさす。松若同じく飲む。此うち花子、珠數を爪ぐり、いろ〳〵思ひ入れあつて

**松若** 初獻も濟めば互ひの約束。

**櫻姬** 自らが御朱印を

**松若** 大友家の重寶、牛王の御鏡。

ト双方出す。この時、袱紗包みの笛を落す。花子、これを見て、思はず立上がり、眞中へ來て、取上げ見て

**花子** この笛は

ト松若、愡りして

松若　こりや某の
　　ト手早く懐へ入れる。花子、落ちたる袱紗を取つて見て、合點のゆかぬこなしにて、松若に隠し、
　　とつくり見て驚く。

櫻姫　互ひのしるしに
　　ト互ひに取かへ、櫻姫、御鏡を懐へ入れる。松若、うまいトいふこなしにて、ニツコリ笑ふ。

松若　これ取らうばつかりに……エヽ、忝い。
　　ト御朱印を懐中する。花子、いろ〳〵思ひ入れあつて

花子　いよ〳〵違はぬ松若さま。
　　ト云はうとする。戸田平、清玄窺ひゐる。松若、花子顔見合せ

松若　コレ……イザ、三々九度の
　　ト杯を差出す。關屋酌をする。花子思ひ入れあつて

花子　アモシ
　　ト飲まうとする。皆々驚き

皆々　清玄尼さま、なんと遊ばしまする。





花子　道理こそ、思ふに違はぬ
　　ト繪姿を出す。

松若　その松若とやらは、叛逆人のお尋ね者。

花子　でも、見す〳〵證據の
　　ト袱紗を出さうとして、思ひ入れ。下座より同宿二人出て

同甲　モシ、清玄尼さま、阿闍梨樣のお尋ね

同乙　何やら仰せ渡される事がござりますゆゑ

同甲　早うお連れ申して來よとの事。阿闍梨樣の御用でござりまする。

花子　阿闍梨樣の

皆々　御用とござりますなら、早うお入り遊ばしませいな。

花子　云ふに云はれぬ
　　ト花子、いろ〳〵あつて

皆々　エ。

花子　なぜ春の夜の、月は朧であるぞいなう。

ト杯を打ちつける。唄になり、花子思ひ入れ。同宿二人附いて奥へ入る。

皆々　清玄さまには、どう遊ばしたのぢやしらぬ。

ト戸田平出て

戸田　ヤア、不義の兩人、詮議がある。動くまいぞ。

松若　不義の詮議とは。

戸田　未だ降參の願ひ相濟まざる常陸之助と、婚禮の杯は不義同然。こんな惡事を聞き出すは、おらが旦那の役目なれば、奴が代つて、二人を召連れ

ト櫻姫を引立てる。女形皆々押へる。松若、戸田平を取つて投げる。

不義の科ある兩人を、引ッ立てるを、なんで投げた。

松若　未だ降參を願ひ中なれど、比企の判官どのゝ内意にて、内祝言のこの杯。これでも申し分あるか。

戸田　サア、それは。

ト清玄出て

清玄　その婚禮の杯は、それでも濟まうが、降參の願ひ相濟まぬうち、常陸之助と櫻姫に、杯さすれば





入間郡領は、叛逆人の一味徒黨だ。

松櫻　サアそれは。

皆々　サア〳〵〳〵。

清玄　この云ひ譯はあるまいが。

ト下座より轟坊出て來り

轟坊　イヤ、その杯は婚禮の、取結びではござらぬ。

清玄　ヤア、なんと。

轟坊　その證據にはこの阿闍梨、櫻姫どのより、杯を受け申さう。

皆々　エヽ。

清玄　ナニ阿闍梨どの、櫻姫の杯を受けるとは心得ぬ。出家たる身は女の手より、物を取ると五百生が間、手無き者に生れるといふ

轟坊　イヽヤ、この酒は當境内の鎭守の神酒、愚僧も隨分頂戴いたす。

松若　ナニ、この酒が神酒とや。

清玄　して、その鎭守は

轟坊　櫻姬。

　　ト思ひ入れ。

松若　ヤア。

皆々　ナニ櫻姬の、御神酒とはえ。

清玄　珍らしい事を聞くものだ。櫻姬といふ神の名は、神武以來はじめて聞いた。

戸田　阿闍梨か蜊か知らないが、この場をむき身に云ひ拔けても、猿ばう眼で見拔いて置いた。生臭坊主め、馬鹿つくすな。

轟坊　いかに凡俗とはいひながら、知らずば云うて聞かさうか。

清玄　オヽ、聞かうワ。

轟坊　都、東山の清水を、武藏の當寺に移したれば、この石塚を清玄坂、上なるは櫻姬の宮。

清戸　ヤア。

轟坊　卽ち木花咲耶姬、富士淺間を勸請すれば、咲耶姬の宮、淺間坂、それを世の人誤まつて、清玄坂櫻姬の宮の神水。

松若　ハテ、珍らしき方言を聞くものかな。この石塚を誤まつて、清玄坂と申すゆゑ





櫻姬　上なる祠の櫻姬は、咲耶姬さまとや。

轟坊　當寺の鎭守は富士淺間、今も武藏の高田在、練馬の道にあれば、尋ねて見やれ。

清玄　そんなら不義とも、叛逆ともいはれぬのか。

松若　詮議おしやれ。

戸田　サアそれは

松若　慮外な下郎め。

　　ト戸田平を引ッ捕へる。立廻りにて松若、懷より御朱印を落す。戸田平取つて

戸田　こりや御朱印

　　ト取つて下座へ逃げて入る。松若驚き、追ひかけ入る。

轟坊　神酒頂戴は阿闍梨が役。イザ

　　ト杯を取上げる。

櫻姬　ヤア申し、この神酒には

　　ト手を押へる。

轟坊　ハテ面妖な。神酒頂戴を、なぜ止め召さる。

皆々　その御神酒には
清玄　何がどうした。
皆々　阿闍梨様には、その御神酒を
清玄　飲まぬは矢ッ張り叛逆か。
皆々　サアそれは
清玄　但し食ふか。
皆々　サア。

ト此うち花子、ツカ〱と出て、轟坊の持つてゐる杯を取つて、ぐつと飲む。皆々驚き

關屋　清玄さまには、その御神酒を
花子　頂戴いたしてござりまする。
轟坊　阿闍梨が代りに清玄尼が、神酒頂戴。清玄どのには、彼れこれと申さるゝが、何と致した。
清玄　ム、ハヽヽヽヽ。甘口な云ひ譯なれど、清玄が身を捨てゝ、破戒の身となつたれば、それでちつとは腹が癒えた。
轟坊　合點のゆかぬ。清玄が神酒頂戴なしたるを、破戒なりとお云やるは
清玄　さう云ふ阿闍梨のうつそりだ。最前婚禮の杯に、妹脊を結ぶ好き鳥と、鴛鴦の血汐を絞り、酒に入れ、それを飲んだる清玄尼、云はずと知れた破戒の比丘尼。
轟坊　すりや、愚僧の代りに飲んだる神酒は、アノ鴛鴦の血酒とや。

ト大きに驚く。清玄、櫻姫へこなしあつて

清玄　これにつけても櫻……イヤ、櫻姫どのと、常陸之助どのゝ婚禮も相濟み、郡領どのもさぞかし喜び……イヤナニ櫻姫どの、明日對面いたすでござらう。

ト唄になり、清玄思ひ入れあつて向うへ入る。櫻姫、花子の側へ行き

櫻姫　申し、姉上樣、なんと致しませうぞいなア。

トこの時、下座より尾上出て

尾上　お供揃ひに取紛れまして遲れましたが、何かの樣子承りまして、尾上が當惑。清玄尼さま、是非もない事でござります。
花子　捨てかねし、身を捨てゝこそ浮かむ瀬と……とてもこの身は、諦めてゐるわいなア。
轟坊　知らぬ事とて婚禮の杯を、叛逆と云ひなせしは、清玄が役目の權威。咲耶姫の神酒なりと云ひくろめたが、妄語の佛罰、折角染衣の身となりし、清玄尼に破戒させたる、阿闍梨が心は未來永劫

地獄へ落つる苦しみでござるわいなう。

ト愁ひのこなし。花子思ひ入れあつて袈裟を取り、前へ出す。靜かなる合ひ方。

皆々　これは。

花子　清玄尼が脱衣のお願ひ。

轟坊　すりや、鴛鴦の血酒を飲みたる罪にて。

皆々　おいとしい事でござりますなァ。

轟坊　無情の風は時を待たず、悟りの花も嵐と散る。たま〳〵受けがたき佛體を得て、佛の御弟子となつたるに、方便の妄語に難儀を救はんと、女心の淺はかに、早まつた事いたされて、殺生飲酒の、二戒を破り、これまで積りし經文もこれ限り。思へば阿闍梨は魔王の思ひ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。

皆々　とは云ひながら清玄さまを、此まゝには。

轟坊　アイヤ、その儀は愚僧も慈悲心あれど、破戒の身となる僧尼には、情をかくるは却つて佛罰。

櫻姬　すりや、御身をいとふは

皆々　佛罰とや。



轟坊　思へば不便な。

ト花子を見て思ひ入れ。

毒龍諸恩念彼觀音。

ト唄になり、轟坊、下座へ入る。風の音、雨車、花散る。

尾上　雨を誘うて花吹雪。イザ、姬君樣。

ト風音にて、最前の一卷吹き落される。尾上取つて

こりや最前の都鳥。エヽ、忝い。

ト懷中する。花子、思ひ入れ。

花子　形見こそ、今は仇なれその一卷。

尾上　アイヤ、憖かにお納め申すでござりませう。

櫻姬　思へば〳〵姉上樣

花子　お師匠樣の教へに任せ、矢張り此まゝ。

櫻姬　そのお嘆きに引かへて、自らは思ふ殿御と、嬉しい添ひ寢も、皆あなたのお情ゆゑ。

關屋　是非もなき清玄尼さまの御有樣……アイヤ、お局はじめ供廻りは、眞珠院に相殘れば、清玄さま

にはお跡から。

櫻姫 左樣なれば姉上樣。

ト花子思ひ入れ。

自らはお先へ。

關屋 姫君樣の

皆々 お立ち。

ト三重になり、櫻姫先に女形皆々、向うへ入る。花子殘り、こなし。本釣り鐘、櫻散る。

花子 あす見んと、思ふ心の仇ざくら、夜半に嵐の吹かぬものかは。

ト時の鐘、合ひ方になり、下座より松若、御朱印を持ち、出て來て、行かうとする。

モシ、松若さま。

松若 ヤア。

ト思ひ入れ。

花子 おなつかしうござります。

松若 某は常陸之助賴國。松若なぞとは人違ひ。





ト花子思ひ入れあつて

花子 エヽ、人違ひとはお情ない。あなたへ操を立てゝの剃髮。その云ひ號けのあなた樣に、最前フッとお目もじなせしに、お姿繪の松若さまに生寫し。ハテ、よい殿御と思ふは仇と、觀念すれど勿體ない、普門品を讀みあげ申す其うちに、松若さまと添ひ寢した夢。とても生きてはゐられぬ身と、覺悟きはめて舞臺より飛び、死んだと思ふに又も御介抱、お口うつしの水の情に助けられ、賴國さまと添はうと思ふきづなを、切らうと思へど胸の炎。迷ふも道理矢ッ張りあなたは、誠の〳〵松若さまであつたもの。

松若 アヽ、コレ〳〵、松若とはそりや何事。某は常陸之助。

花子 アレマア、矢ッ張り憎らしい。最前婚禮の杯ごとのその中にて、松若さまと知つたれど、叛逆人の惡名を受け給ひ、鎌倉よりコレこの如く

ト繪姿を出し

お姿繪を以てお尋ねのお身の上。知つてもわざと申さぬは、人目を憚かる清玄尼が、云ひ號けの貞節と、思うてゐるに知らぬお顏は、そりやあんまりぢや、つれなうござりまする。お姿繪と、これほど生寫しのあなた樣が

松若　そりや心得違ひ。億兆の人同じからず、烏は烏、鷺は鷺に、似たる物はいくらもある。して某を
いよ〳〵以て、松若といふには

花子　證據のこの裂れ。これが有つては

　ト最前の袱紗を出す。松若取つて思ひ入れあり

松若　これが何と致した。

花子　何としたとは、世にも稀れなる、赤地錦の富田裂れ。云ひ號けのしるしに上げた裂れぢやもの、
これをお持ちなされては

松若　ハテ、松若でなければ、どこがどこまでも

花子　すりや、此やうに申し上げても

松若　常陸之助頼國。

花子　アノ、これほど慥かな證據かあつても

松若　知らぬわい。

　トきつとなり、袱紗を引裂く。

花子　ヤア、大切なる袱紗まで引裂いて……エヽ胴慾な。たとへあなたがお名乗りなうても、松若さま
に違ひない。松若さまぢや〳〵、松若さまでござりますわいなア。

　ト取りつくを、沒義道に振り拂ひ

松若　知らぬといふに。

　トこの時、戸田平出て

戸田　その御朱印を

　ト松若にかゝる。戸田平を當てる。これにて、タヂ〳〵として花子に行きあたり、倒れる。花子は松若の羽織の袖を掴みしまゝ、袖を引切り、トン〳〵と上の方へ行き、瀧壺の中へ落ちる。水の音。羽織の袖は瀧壺の縁にかゝる。松若、ツカ〳〵と花道へ行き、振りかへり

松若　ヤア、清玄尼には瀧壺へ……わしがつれないばつかりに、可哀さうな……はツつけ坊主。

　ト思ひ入れ。唄になり、向うへ入る。雷の音になり、下座より隅田平出て來り

隅田　いま〳〵しく追ツかけやアがる。暫くどこぞへ

　トあたりを見廻し

ヨシ〳〵、この合羽籠の中へ

　ト隱れる。下座より惣太出て來て

惣太　一卷は吹き飛ばされる。あの野郎は、どこへうせやァがつた。

戸田　ドッコイ、この合羽籠を

ト擔ぎあげる。惣太、ウロ〳〵尋ねる。下座より牛島軍次出て來て

軍次　ヤイ〳〵、怪しき合羽籠。そりや此方の

トかゝるを、戸田平振り切る。

惣太　ナニその中に

ト同じくかゝるを、三人立廻り。戸田平先に合羽籠を擔ぎ、軍次跡より、一散に向うへ入る。此うち花子、瀧壺より、本水に濡れ、苦しみながら、枝垂れ櫻に取附き、這ひ上がらうとしてゐる。惣太これを見て

誰れだか瀧壺に

トきつと見る。雷の音、雨車すさまじく、惣太、花子をやう〳〵引あげる。花子、苦しみながら惣太に取りつき

花子　松若さま〳〵。

惣太　ヤア、こなたは先刻の花子の前。有り難い、しめたぞ〳〵。

ト花子を抱く。花子、狂氣のやうになり、あちこち尋ねる心。立廻りよろしく

花子　胴慾なは松若さま。恨めしいは櫻姫。

ト向うを見詰め、思ひ入れ。惣太は花子を捕へる立廻り。以前舞臺より落ちたる傘を取つて立廻り。花子行かうとするを、惣太、傘をひろげたるまゝ花子が肩先へ引ッかけ、とめる。立廻りにて兩人引合ひ、これにて傘の柄抜けて、惣太の脇腹へあたりし體にて、撞と倒れる。花子、傘の頭をかむりしまゝ花道へ、ツカ〳〵と行く。この時、雷きびしく鳴り、ガラ〳〵と落ちたる體にて、本鐵砲の音する。途端に花子、花道へバッタリこけ、かむりし傘を前へ投げ出す。この時、花帽子取れて、青坊主になり、この雷の音に驚き、耳を押へ、頭を撫でゝ、悄り思ひ入れして、右の傘の頭を持ち、スッと立ちながらこれをかむる。爰にてチョンと木の頭、よろしく、ひやうし幕の外、本釣り鐘にて、花子思ひ入れあつて向うへ入る。跡シャギリ。

幕

## 第一番目　四建目

### 入間館の場

役名――中老、尾上。藪坂元庵。奴、隅田平。北條四郎義澄。侍女、關屋。奥女中、綾瀬。同

花形。同、梅田。同、待乳。同、宮戸。同、淺茅。同、柏尾。同、築地野。同、七浦。同、霧島。
清水平馬之助清玄、奴、戸田平。侍女、庵崎。粂の平内左衛門長盛。尾上召仕ひ、お初。局、岩藤。

本舞臺、一面の網代塀、見越しの枝垂れ櫻、すべて入間の館、奥庭前の體。幕の内より前幕の合羽籠をおろし、戸田平これを圍うて居る。都、待乳、兩方より取卷いて居る。上の方に關屋、手燭を持ち、宮戸、花形、梅田、下駄を穿き窺ひ、詰め寄せて居る。この見得、少しばたばた、管絃にて幕明く。

女皆　動くまいぞ。
戸田　こりやお女中、何とさつしやります。
關屋　何ゆゑとは、合點の行かぬ、清玄さまの下部戸田平、入間家のお庭先、まだ明やらぬ春の夜に、雨具を入れしその荷籠。案内も無う此ところへ。
都　掟嚴しき奥御殿、入込みしには樣子があらう。
待乳　殊には今日鎌倉より、御上使樣もお入りといひ
梅田　樣子を聞かぬ其うちは、滅多に奥へは



三人　やる事はならぬ。
戸田　これは又迷惑千萬。清水のお供歸り、大部屋の角内めが、どぶろく酒に他愛なく、お供を缺くのが氣の毒さ、奴同士に相身互ひ、急いでとつぱ合羽籠、擔げて來ても餘所のお屋敷、勝手を存ぜず、うかうかと、お庭先まで參つた麁相、お女中方、免さつしやれて下さりまし。
關屋　お供先より賴まれて來たとあつても、陪臣の入る事ならぬ奥座敷、殊には他家の奴戸田平、其ままには捨て置かれぬ。
戸田　すりや、どうあつても下郎めを。
關屋　お錠口まで伴うて、役人中へこの由を
三人　屆けし上にて兎も角も。
戸田　エ、まゝよ、どうするものだ。女中を相手に云ひ譯しても、役に立たぬ水掛け論、役人衆に云ひ譯をしませう。
ト鷄鳴く。
關屋　ありやもう夜明の
三人　あの鷄。

戸田　エヽコレ、夜が白んでは。
ト合羽籠へ思ひ入れ。女形皆々取卷いて思ひ入れ。

關屋　サア、一緒に

三人　歩みやいなう。
ト唄になり、戸田平合羽籠に心を殘し、關屋先に女形五人跡より附いて上の方へ入る。三昧線入りの下り葉になり、向うより尾上、衣裳、裲襠にて、岩藤同じく跡より綾瀨、淺茅、着流しにて桃の花を筒に活け、持ち出づる。跡より七浦、築地野、柏尾、桃の花を持ち出る。

尾上　岩藤さまにはお早いお上がり。今日は鎌倉表より、御上使のお入りとあつて、先程粂の平内左衞門さまよりのお達し。何かと一入お心遣ひに存じ上げまする。

岩藤　これは〱御挨拶。この局より其許樣、姫君樣へ御內意の御上使とあれば、定めし御心配にござりませう。例年三月十五日は、桃園山王權現の祭禮、とりまぜた奧向きの賑ひ。

綾淺　それゆゑ桃の一枝を献上。

三人　各自持參いたしましてござりまする。

尾上　合點の行かぬ。奧御殿のお庭先に、雨具を入れしあの籠の、何か樣子のあるべき事。綾瀨さま、淺茅さま、とく〱と樣子を。

綾瀨　成る程、お供の衆の麁相なら、お表にあるべき筈。

淺茅　この奧庭にござりまするは、合點が參りませぬ。

尾上　その籠の蓋を開いて御覽なされませ。

兩人　畏りました。
ト蓋を明けようとするを、岩藤とめて

岩藤　アヽ、コレ〱、開いて見るには及ばぬわいの。サア〱待つた。

尾上　お局樣、合點の參らぬあの籠の、詮議を待てと仰しやりまするは。

岩藤　さればいの。下部どもが麁相で、取忘れたその籠、別に仔細のない事。咎め立ては、それ〲の役人もあり、奧向きで詮議は、無用になされませいの。

尾上　サア、その奧向きのお庭先、怪しい事と存じまするゆゑ。

岩藤　ハテ、怪しうあらうが、あるまいが、此方の不念にはならぬ事。

尾上　でも又、後日に。

岩藤　奧向きの事は局が取計らひ、お案じなされぬがようござります。

ト奥より都出て

都　尾上さま、これにお入りなされまするか。最早御上使のお入りゆゑ、さき程お召しでござります

る。

尾上　姫君のお召しとあらば、直ぐさま御殿へ。

岩藤　この局は、兄平内左衞門どのゝ出仕を待ち受け、話しもあれば

綾淺　私しどもゝ御一緒に

尾上　お先へ參るでござりませう。

ト唄になり、尾上こなしあつて、綾瀨、淺茅、都附いて奥へ入る。岩藤、七浦、柏尾、築地野殘る。

跡合ひ方。

柏尾　お局樣、兎角何事に依らず、あの尾上が裁き立て。この合羽籠を怪しんでの今の詞。

七浦　お局樣のお詞で、それなりに濟んだれど、この奥に斯うしてあるのも不思議の一つ。

築地　蓋を開いて見たならば、樣子が知れるでござりませう。

岩藤　早う開いて見や。

ト三人して立寄り、蓋を明けると、中より元庵縛られた形で出る。

柏尾　ヤヽこなさんは。

七桒　藪坂元庵どの。

　　ト縛りを解いてやる。

元庵　ヤレ〳〵、窮屈な目に遇つた。

　　ト岩藤を見て

　ヤ、あなたはお局様。

岩藤　合點の行かぬ。どういふ事であの中に。

元庵　イヤ、かねてあなたのお頼み、件の藥を調合いたし、お手渡しと存ずる内、御歸舘觸れの混雜に奴が擔げる合羽籠、如才もなく支へるところを、つい打こまれたこの仕合せ。併し、好い所でお目にかゝりまする。

岩藤　ムウ。して局が、頼み置いた藥は。

元庵　お頼みに依つて調合いたした、拙者が祕方の啞藥。

　　ト懐より袱紗包みの疊紙を出して渡す。

岩藤　ムウ。すりや、これが件の祕方、啞になる藥かや。



染所御花川田隅

元庵　その妙藥を、酒に浸し服ますれば、心の臓を閉ぢ塞ぎ、啞ころになる稀代の妙藥でござりまする。

ト下座より霧島、三方に神酒徳利を載せ、持つて出て

霧島　お局樣の仰せに依つて、神前に飾りある桃の酒、密かに持參いたしましてござりまする。

岩藤　よいく。今日山王權現の神酒の中へ、これを密かに入れ置いて、あの尾上に用ゆれば、向後差出口もならず、御奉公も直ぐにお暇。

霧島　日頃からつべこべと口きいて、わしらを嗜ませる腹癒せに

七浦　啞ごろにしたら、何でも此方から云ひすくめて、揚句には御殿をお拂ひ箱。

柏尾　何もせたら負せて、罪に取つて落せば、お局樣の心の儘。

築地　お神酒の中へ混へてあるとは、なんぼ賢い尾上でも、夢にも知る事ぢやござりますまい。

元庵　それに付いても、肝腎の事がござりまするぞや。

四人　肝腎の事とはや。

元庵　この毒消しが肝腎でござりまする。

ト懐より出す。

四人　何ぢや。毒消しとは。



元庵　ハテ、その啞になる藥を、どういふ機みにお前方が、服むまいものでもない。そこで前方に、この藥さへ用ゐて置けば、啞になる氣遣ひはござりませぬ。

岩藤　成る程、それも、用意は無けりやならぬ藥。

元庵　この金の色が毒消し、銀の模樣が啞藥、二種ともにお渡し申しまする。

ト渡す。この時後へ尾上出かけ、樣子を窺ひ、下座へ入る。

岩藤　成る程、神酒頂戴の折柄、念に念を入れる尾上、毒味などと云うた時はこの毒消しお流れ下されるは知れた事。こりや用心に、わたしが服んで置きませう。

霧島　差詰め鬼役のこの霧島。

岩藤　人目に立たぬ内に。

霧島　畏りました。

ト管絃になり、德利の口を抜き、兩方へ二種の藥を入れ

先づ斯うして、一つは毒消し、一つは毒。

岩藤　イヤく、それでも如何やら紛らはしい。それには幸ひ。

ト生筒に入れし桃の花の白と赤とを取つて二つの口へさし

右の口の白いは毒消し、赤いは唖になる藥。かんまへて、取違はぬやうに、合點か。

霧七　白いは毒消し。

柏元　赤いは毒藥。

岩藤　コレ〳〵、密かに〳〵。

　ト五つの時計鳴る。

四人　ありやもう、五つのお時計。

岩藤　この岩藤は御前へ相詰め、何彼の手番ひ。その神酒を元の所へ。

元庵　して、私しへの御褒美は。

　ト岩藤懐の箱せこより包み金を投げて遣る。元庵取つて

こりやお金、有り難い。

　ト戴く。岩藤「エイ」と懷劍を打付ける。元庵「ウン」と死ぬ。

四人　これは。

岩藤　後日の妨げ。死骸は直ぐにその籠へ。

四人　心得ました。お局樣。



岩藤　ドリヤ、御前へ上がりませうか。

　ト唄になり、岩藤こなしあつて下座へ入る。

霧島　成る程、拔け目の無い岩藤さま。

築地　コレ、人目にかゝらぬ樣に、早う死骸を。

　ト霧島、七浦、元庵が死骸を合羽籠へ入れる。此うち下座より尾上出て、德利の口の花を、あちらこちらにさし替へ、懐より金の香包みを出し、毒消しの藥と摺替へ、持つて入る。此うち四人、合羽籠を元の樣にして

霧島　さて、これから用向きの毒消し。

七浦　赤い方が毒ぢやぞや。

霧島　合點ぢや〳〵。一ツついでおくれ。

　ト土器に受けて呑む。柏尾、元の樣にして

サア、これで氣遣ひ無い。この毒消しはわしが方へ。

　ト摺替へられし香包みを懐へ入れ

七浦　この啞藥は尾上さま。

柏尾　お神酒は、そつと元の所へ。

七浦　サア、霧島どの。

霧島　サア、ござんせ。

ト唄になり、柏尾は德利を持ち、霧島、築地野、七浦、奥へ入る。トばつたりと音して本神樂になり、正面の塀を切り破り、戸田平、頰冠りをして出て、あたりを窺ひ

戸田　女郎どもを云ひ曲げては來たが、これから直ぐに奥にも傳へ、合羽籠のお旦那を、櫻姫の寢所まで、忍びこませるこの切り穴。この館の執權職、粂の平内左衞門さまから、云ひ附けられた廻文を。

ト懷より廻文を出し、また袱紗に包みて、三建目の鯉魚の一軸を出し

まだその上に、お旦那淸玄さまから鯉魚の一軸、これも斯うして持つては居るが、先づそれよりは廻文狀、平内どのに手渡して、褒美の金にしたいものだが。

ト思ひ入れ。下座より人音するゆゑ身を忍ぶと、管絃になり、下座より綾瀨、袱紗に包みし都鳥の一卷を持ち出で

綾瀨　これこそは吉田の家に傳はりし、松若さまの御形見、都鳥の一卷、尾上さまの云ひつけにて、奥殿より持ち參れと密かの仰せ。ちつとも早う。

ト行かうとするを、戸田平これを聞いて居て、つか〳〵と出て、都鳥の一卷を取らうとする。

ヤ、こなたは淸玄さまの御家來戸田平、大切なこの都鳥の一卷、手をかけて何とするのぢや。

戸田　知れた事、その都鳥の一卷、おれが方にも入用だ。きり〳〵此方へ渡して行け。

綾瀨　ムウ、奥庭近く忍び入り、この一卷を奪はんとは合點が行かぬ。尾上さまへ申し上げて、其方の詮議。

戸田　ハヽヽ。うぬ等に詮議されるやうな、奴だと思ふかい。こま言吐かさずその一卷、此方へ渡せ。

ト手を掛ける。

綾瀨　イヤ、其方を。

ト管絃になり、ちよつと立廻りあつて、戸田平、都鳥の一卷を引ツ奪る。綾瀨「それを」と寄るを、立廻りにてちやつと當てる。綾瀨「ウン」と倒れる。

戸田　ソレ、都鳥の一卷だ。

ト手早く合羽籠の蓋を明け、一卷を打込み、行かうとする。綾瀨心付き

綾瀨　その一卷を。

　　ト戸田平を捉へ、懷ろより鯉魚の一軸を引出す。

戸田　ヤア、それを。

　　トやるまいとする。兩人一軸を奪ひ合ひ立廻り。この時下座より、尾上、つか〳〵と出て、戸田平を支へて一軸を取る。

綾瀨　ヤア、尾上さま。

尾上　これ持つて早う。

　　ト綾瀨へ渡す。

戸田　うぬを。

　　ト行かうとするを留めて

尾上　爰かまはずと。

綾瀨　心得ました。

　　ト花道へかゝる。向うにて

呼び　粂の平內左衞門出仕。

　　ト呼ぶ。中の舞になり、綾瀨一軸を持ち、花道へ走り行く。向うより粂の平內左衞門、衣裳社杯にて、菖蒲革の侍ひ二人附き出る。綾瀨、つか〳〵と平內に行き當る。平內手早く一軸を引取り、綾瀨を下の方へ突廻す。侍ひ二人綾瀨を圍ふ。此うち戸田平、ちやつと立廻つて、尾上を振り切り、花道へかゝる。平內と行逢ひ突退けやうとして、平內、戸田平が利腕を捻上げ、きつとなる、尾上見て

尾上　平內左衞門長盛さま、只今御出仕でござりまするか。

平內　この長盛が出仕の先、狼藉至極のこの振舞ひ、何さま樣子のあるべき事。それへ參つて逐一に、仔細つぶさに承るでござらう。

　　ト矢張り右の鳴り物にて、戸田平を捻上げながら、じり〳〵と、綾瀨も家來に圍はれ本舞臺へ來り

家來、女を取逃がすな。

侍ひ　ハツ。

　　ト戸田平振り切り、逃げうとして顏見合せ

戸田　ヤ、こなたは。

　　ト平內ちやつとあてる。戸田平「ウン」と倒れる。

平內　慮外な奴め。

ト思ひ入れあつて、綾瀬に目を附け

見ますれば奥女中の、何か下部と立ち爭ひ、携へ持ちしこの一品、樣子あらんと某が、取上げてはござれども、尾上どの、其許、樣子御存じかな。

尾上　成る程、あれなる綾瀬さまは頼まれ手。その品は私しが所持の一品。あれなる下郎、奪ひ取らんと致せしところ、折好くも長盛さまの御出仕にて、恙なうこの場の仕合せ。

綾瀬　心急くまゝ無禮の段、眞平御免下さりませ。

平内　ムウ。すりや、この一品は尾上どの、其許の御所持ある

尾上　大切な品でござります。

平内　然らばちよつと。

ト袱紗を取らうとするを

尾上　アイヤ、大切な私しが守り、御覽は御容赦下さりませ。

平内　何か樣子のあるべき一卷、若しも吉田の都鳥。

尾上　エ。

平内　イヤサ、よし守りにもせよ、この場の仕儀、身共が爰で



尾上　强つて御覽と仰せあらば、

ト解かうとする手を留め

今あの者があなた樣に、詞を交せしこの場の樣子。

平内　ヤ。

尾上　引起してお表の、役所へ連れ行き、糺しませうか。

平内　ア、ヤ、奥向きは格別、非道の沙汰は女中方の指圖に及ばぬ。家來に云ひつけ、身共が詮議。

尾上　左樣ござればその一品、御覽あらずと、この方へ。

平内　左程に云やるこの一品、押して開くも何とやら、先づ此まゝに

尾上　お渡し下さる事ならば、この場の事は如何やうとも、後しての御詮議、兎も角も。

平内　守りとあらば返上申す。

ト尾上に渡す。

尾上　慥かに落手いたしますれば、御用も繁き今日の奥殿。

平内　後刻出仕の節までは、然るべきやう尾上どの。其方達も次で休息。

綾瀬　御免を受けて私しも

尾上　何彼は御前で、長盛さま。

平内　尾上どの。

尾上　後程お目にかゝりませう。

　　ト管絃になり、尾上思ひ入れあつて、綾瀬、侍ひ二人跡に附いて入る。戸田平起きて

戸田　長盛さま。

平内　コリヤ。

　　ト管絃になり、戸田平あたりを見廻し

戸田　かねてあなたの云ひつけゆゑ、諸國への廻文狀を手渡し致さんと、この奥庭まで忍び入り、見咎められて今の仕合せ。

平内　して、いま尾上が持ち行きし、あの一卷は。

戸田　拙者が所持の鯉魚の一卷、と心得て尾上めが。

平内　すりや、鯉魚の一軸を。

戸田　持つてうせてもありや似せ物。それよりは預かり置いたこの廻文。

　　ト廻文狀を出し、渡す。

平内　北陸道の諸武士を初め、殘る方無きこの姓名、事成就のその上は、恩賞褒美。喜べ〳〵。





戸田　近國他國を歷巡つて、人を集めたその廻文、一廉の褒美と思つたに、事成就した上の事とは。

平内　いかにも。平内左衞門が詞に二言は無い。その時其方が望み次第。

戸田　アヽコレ、平内どの、そりやァちつと料簡違ひ。云はゞ大事の働きして、命がけの密事の使ひ。骨を折つたるこの戸田平、早いが德の今の世の中、氣の長い事を云はずと、當座の褒美が今貰いたい。

平内　ムウ。して、其方が望みは如何ほど。

戸田　ハテ、千兩でも萬兩でも、多いとは云はぬ貰ひ次第、とサア、斯う云つたならお定まり、褒美をやらうと拔討ちか、ころりばつたり古いやつ。それを一倍新しく、その廻文を此方へ取り、貴樣の首を一ツにして、鎌倉へ訴人すれば、一廉の褒美の金、それが近道。平内、われを。

　　ト拔いて切り附ける。平内突廻す。この時後の合羽籠より隅田平飛び出て、戸田平が拔身を取つてボンと切り

隅田　罰あたりめが。

　　ト管絃になり

平内　其方は。

隅田　疾くよりあれに隱れ笠、合羽籠に身を忍び、樣子を聞いて飛んで出て、後日の邪魔にと一討ちに討つて捨てたも彼奴めが强慾、お指圖待たず拙者めが、無禮の段は御家老樣、御免なされて下さりませ。

平内　すりや、彼の中に最前より。

隅田　忍ぶ間に戸田平めが、中へ隱せし一品は、吉田の重寶都鳥、イザ、お受取りあられませう。

ト渡す。平内取つて

平内　誠にコリヤこれ都鳥の一卷。先達て我が家來、猿島惣太に預け置きしが、この屋形に廻り來るは心得ぬ。

隅田　その猿島惣太めが、花子の前の色香にうツ惚れ、松若どのゝ形見だと、花子の前に渡したも、おのが仕かける戀の罠、廻り〳〵て又元の、平内さまのお手に入つたも、勿怪の幸ひ。

平内　下郎ながらも腹心と、彼奴が魂ひ見込みしゆゑ、預け置いたる都鳥、花子の前の艶色に、心奪はれ、うか〳〵と、人手に渡せし猿島惣太、思慮なき下郎に大切なる、一巻迂濶に預けしは、この平内が不覺の至り。併し再び我が方へ、戻り來るも隅田平が働き。出來した〳〵。

ト懷へ入れる。隅田平思ひ入れあつて、平内が前にどつかと居て

隅田　平内どの、サア、すつぱりとやつて下さい。

平内　なんと。

隅田　いま戸田平めが吐かした通り、褒美は何時でもお定まり。大事を聞いたこの隅田平、下郎は口のさがなき者、どうで生けちやア置きはしまい。さすればこなたの寢覺めも氣樂だ。斯う云ふからはこの體、野へ出した死人も同然。念佛なしにすつぱりと、一思ひにやつて下さい。

平内　韓信はせう夫を害し、佐々木は浦の男を殺す。千丈の堤も蟻の諺。

隅田　血祭りがてらだ、今爰で。

平内　粂の平内が、刃の錆となしてくれう。

隅田　サア、すつぱりと。

ト合ひ方になり、合掌する。平内、刀を抜き、隅田平が目先へずつと差出す。ヂツと思ひ入れ。また刀の背を襟元へ當てる。構はず思ひ入れ。平内振上げて打込むを、かい潜つて緊りと留め

隅田　ドツコイ、そんなら奴が願ひの通りに

平内　身が手にかけてこの世の暇。

隅田　下郎が首を平内さまに、慥かに遣らうと覺悟の奴。

平內　それゆゑこの場で、われが命は。

ト切つてかゝる立廻り。

隅田　進上いたさう、その代り、その懷中の

ト廻文へかゝる立廻り

平內　身共に命をくれながら、この廻文に心をかくるは、さてはおのれは。

隅田　どうで冥途へ行がけの

平內　駄賃に持つて行きたいか。

隅田　なんでもない事。

平內　すりや、一卷を渡したも

隅田　その廻文を

ト立廻り、平內が廻文を引出し

さてこそこれに。

ト平內引取る。

荷擔しませう。





平內　ヤ、なんと。

隅田　吉田の重寶を渡した奴、及ばずながらあなたの片腕。

平內　一味同心いたすぢやまで。

隅田　心置き無く腹心の

平內　ハテ、不敵の魂ひ見屆けし上からは

ト廻文を投げやる。隅田平取つて

隅田　すりや、この廻文を。

平內　後日のそくたく、しかと汝に。

隅田　お預けあるか。

平內　いかにも。この上猶も大望の

隅田　成就いたさば

平內　入間の家國押領なし。器量次第で

隅田　二合半から

平內　武士に取立て

隅田　槍一筋も

平内　突かせてくれう。

隅田　然らば此まゝ。

平内　期して參會。

隅田　盛長さま。

平内　コリヤ。

ト兩人よろしく、唄になり、隅田平向うへ走り入る。平内跡見送り

下郎ながらもあの隅田平、手なづけ置かば、まさかの時の

ト思ひ入れ。戸田平心附き、よろぼひ寄つて

戸田　僞り表裏の平内長盛、企みの一々。

ト行きかゝるを引留め

平内　助け置かれぬ、下郎は口ゆゑ。

戸田　ヤ。

ト逃げやうとするを、平内拔討ちに切り、鼻紙にて血刀を拭ふ。この見得、管絃にて道具廻る。



本舞臺、一面の高二重、見附金襖、上の方に九尺の亭屋體、此うち結構なる御堂に注連を張り、三方に蒔繪の箱を載せ、机に飾り、この前に幕明の神酒德利供へあり、二重舞臺の前側、一面に御簾上下ろし、すべて入間の館奧殿の體。管絃にて道具納まる。

ト三味線入りの亂れになり、向うより淸水淸玄、長社杅、大小にて、跡より關屋、待乳、都、淺茅、綾瀨續いて出て、花道に手をつかへ

關屋　淸水淸玄さまには、お役目とあつて當館への御入り、お出迎ひ申しましたる私しども、お案內申し上げまするでござりませう。

淸玄　武將の御內意を蒙り、罷り越したる入間の館、君殿原に引替へて、物柔かき女子ばらが出迎ひ。流石大家の奧床しさ。櫻姬の館の物好き、疊觸りも無骨の淸玄、役目なれば、免してくりやれ。

ト矢張り右の鳴り物にて、淸玄、本舞臺へ來て、上の方床几にかゝる。女形皆々並好く列ぶと、御簾の內にて

尾上　鎌倉よりの御上使、義澄さまのお入り、いづれも御挨拶あられませう。

ト三味線入りの樂になり、一面に御簾卷上げると、二重舞臺上の方に、北條四郎義澄、長社杅上使の

拵へにて床几にかゝり、尾上、手をつかへ居る。關屋皆々下の方へ並び

關屋　義澄さまには今日の御役目

皆々　御苦勞に存じ上げまする。

清玄　義澄どのにはお早いお越し。拙者も御同伴と存じながら、思はぬ遲參、御容赦下され。

女皆　清玄さまには、先づ〳〵これへ。

義澄　今日卽ち上使を蒙り、當家に傳はる關八州の御朱印、並びに清玄どのゝ家の寶、鯉魚の一軸、父義時の名代として、若輩の某、內見の役目、相役の其許、萬事よろしく賴み存じまする。

清玄　何がさて拙者とても、相役とは申しながら、某が家へ傳はる鯉魚の一軸、其許が御內見、この清玄は入間家の御朱印の內見、いづれ疎略ならざる役目、故無く相濟む上までは、心遣ひな儀でござる。

尾上　御兩所に申し上げまする。櫻姬は折惡しく風邪に冒され、引籠り居りますれば、憚りながら名代として、中老尾上、お受け申し上げまするでござりませう。

義澄　すりや櫻姬には、風邪に冒され、病氣とな。

尾上　左樣でござりまする。



清玄　エヽコレ、折惡い姬の病氣、今日の役目が丁度好い首尾……イヤサ、首尾好く內見濟むまでは、櫻姬にも心遣ひ召さらうな。

尾上　當館の鎭守、桃園山王の祭禮は、卽ち今日にござりますれば、古例を以て御朱印の御內見は、入間家の古例、御內見よろしく願ひ奉りまする。

トこの時上座にて

岩藤　憚りながら御內見、暫くお待ち下されませう。

ト管絃になり、岩藤出て來て、好き所に手をつき

先づもちまして御兩所樣とも、今日のお役目、御苦勞千萬に存じ上げまする。

義澄　當館の局頭、岩藤、何ゆゑあつて內見を相待てとは

清玄　仔細ばしあつての事か。

尾上　岩藤さま、御內見をお咎めありしその仔細は。

岩藤　憚かりながら御兩所樣へ申し上げまする。今日は當館の氏神たる、桃園山王の神事に付き、御朱印御內見は入間家の古例、卽ちあれなる神前に、供へ奉りし桃の酒、その神酒を頂戴あつて後、御內見を相願ひまする當家の古例、それゆゑこの岩藤、お止め申し上げましてござりまする。

清玄　成る程、例年三月五日は、入間の鎭守山王の神事、桃の酒と號し、神酒櫻姫が頂戴の上、内見いたすは古例とかねて聞き及ぶ。申さば入間の吉例。

岩藤　大切なる今日の式法、その辨まへも無う只管に、御内見を願ふ尾上どの。なんぼ町家に生ひ立つて、お館向の格例を、御存じないと申すものゝ、近頃麁略なお取扱ひかと存じられまするわいの。

尾上　成る程、神酒頂戴の儀も、お館の古例と存じてはありながら、折惡しき櫻姫さまの御病氣、それゆゑ名代の、この尾上なれば。

岩藤　サア、その御名代なれば、則ち姫君に成り代り、神酒頂戴あるが、古例外さぬお前のお役目。

清玄　イカサマ、神酒頂戴の古例は、鎌倉表より定め置かれし入間家の吉例、武將より下し置るゝお流れも同然、それをもどくは上への恐れ。名代とあらば中老尾上、急いで神酒を頂戴おしやれ。

岩藤　疎略ならぬ今日の式法、遲なはつては御上使への無禮。誰ぞお次の衆、御前へ早う。

女三　ハア、。

ト管絃になり、下座より七浦、柏尾、築地野出て來て

二人　御用でござりまするか。

岩藤　神前に供へある桃の酒、今日の御名代尾上どのへ。

三人　畏りましてござりまする。

ト柏尾、三方の徳利を其まゝ二重舞臺より持つて下りる。築地野、七浦、三方の箱を一ツづゝ持つて下りて平舞臺へ置き、下がる。

築地　御内見の二つの箱、當家の御朱印。

七浦　清玄さまお預けありし鯉魚の一軸。

柏尾　神前に供へし桃の酒。

三人　持參いたしましてござりまする。

ト岩藤こなしあつて

岩藤　サア、尾上どの、神前の神酒、急いで御頂戴。

尾上　お免しを受けまして、それへ參つて、神酒頂戴いたしませう。

ト始終此うち管絃にて、平舞臺へ下りる。

岩藤　尾上どのには姫君さまの御名代、その神酒を……十分に心を着けて。

ト柏尾に呑みこます。柏尾思ひ入れあつて

柏尾　お酌いたしまするでござりませう。

ト尾上が前を通り、下の方へ行かうとするを、尾上わざと柏尾が裾を押へる。柏尾ばつたり轉び、德利を打轉かす。

七筞　ヤア、大切なその神酒を

女皆　柏尾どのが

ト柏尾悔りし狼狽へ

柏尾　イエ〳〵、こりやわたしが粗相ぢやござりませぬ。アノ、尾上さまが

尾上　アイヤ、たとへ神酒はこぼれても、お土器さへ頂戴いたせば、古例外れぬ御上使の御前。

ト土器を取つて戴き、飲む眞似して

神酒頂戴仕りましてござります。

ト三方を取のける。岩藤こなしあつて

岩藤　尾上どの、見す〳〵知れた今の仕儀、古例の神酒を打明けしは、柏尾どのゝ粗相にも致せ、神酒頂戴が濟んだとは、御上使の御前、この岩藤を阿房になさるゝか。但し又別に樣子の有つての事か。殊に依つては岩藤が、その儘には差置きませぬぞ。

尾上　さう仰しやれば上使の御前、包むも詮無きこの場の仕儀。この神酒は怪しいと存じますゆゑ。



岩藤　ナニ、この神酒が怪しいとは、

七浦　神前に供へありし今のお神酒、怪しい事とは何が怪しみ。

柏尾　それ〳〵、大切な今の酒、我が麁相を人に塗らうと思うて、怪しい酒とは、どういふ仔細。

築地　しなに依つては御中老でも、わたしらが屹度糺さにやなりませぬ。怪しい酒と仰しやるは、何ぞ確かな

三人　證據でもござりまするか。

尾上　成る程、その證據をお目にかけませう。

三人　ナニ證據とは。

尾上　庵崎さま、霧島さまを早うこれへ。

ト下座にて

庵崎　ハア、。

ト管絃にて、庵崎、霧島をしごきにて縛り連れて出る。皆々悔り。

皆々　ヤア。お前は庵崎さま。

三人　霧島どのを縛めて、この體は。

岩藤　合點の行かぬ尾上どの、奥向きの政道躾は、この局役の岩藤が差配、それに何ぞや理不盡に、縛めの仕置立て。その上確かな證據とは。

庵崎　イヤ、憚りながら尾上さまよりお指圖。今日あれなる神前に、供へ置きたる桃の酒、その中に藥を浸し、尾上さまを啞ごろの病にせんと工み事。只今奥にて白狀ゆゑ、何者に頼まれしか、その儀は御前で問ひ狀かけんと、それゆゑの、この仕儀でござりまする。

　ト岩藤ハツと思ひ入れ。清玄も思ひ入れ。

敵三　そんなら霧島どのが何も彼も。

霧島　サア、云ふまいと思へども。

　ト岩藤の方へ寄るを、清玄ツカ〳〵と行て、霧島を刀の鐺にてあてる。

皆々　これは。

庵崎　詮議のある霧島どのを。

清玄　ハテ、ザワ〳〵と尾籠至極、大切なる御朱印の改め、內見も濟まぬうち無益の論談、詮議は跡で。

尾上　すりや、この場にて御內見。



清玄　役目の某、義澄どの。

義澄　清玄どのにも共々に。

　ト始終管絃にて、清玄こなしあつて二重舞臺へ上がる。

尾上　打捨て置かれぬこの場の樣子。

岩藤　ハテ、御內見遲なはつては、御上使へ無禮、上への恐れ。

　ト三方を一つ〳〵義澄と清玄が前へ直す。

尾上　イザ、御內見下されませう。

義澄　入間家の御朱印は清玄どの。

清玄　拙者が所持の鯉魚の一軸、イザ、とくと。

兩人　內見いたすでござらう。

　トこなしあつて義澄、箱の蓋を明けて思ひ入れ。清玄同じく蓋を明け、思ひ入れあつて兩人顏見合せ

義澄　清玄どのゝ所持の箱、中老尾上預かりと聞く。それにて一應改め見よ。

清玄　入間家の御朱印も、岩藤尾上立合うて、とくとそれにて改め見よ。

岩尾　すりや、我れ〳〵に。

ト きつと云ふ。岩藤、尾上、二つの箱を持つて來て、蓋を明けて、悄り思ひ入れ。

清玄　入間家の御朱印。

義澄　鯉魚の一軸、我れ〳〵が内見いたすは

兩人　その品か。

岩藤　こりやコレ御朱印と思ひの外

尾上　一軸ならぬこの草履。

岩藤　二つの箱に片しづゝ、ヤア〳〵〳〵。

ト 驚く、尾上、中より草履を取出し

尾上　大切なる一品の、箱に入れたるこの草履は。

岩藤　眞菰を以て作りたる、佛足守護と號す草履、慥かに昨日清水にて、花子の前さま御剃髪の折柄、お用ひありし金剛草履、片しづゝ入れあつては、すりや御朱印と云ひ、一軸までも、アノ清玄さまが

清玄　盗み隠してその跡へ、草履を入れしは女の淺墓、差當つたる二品の紛失。

岩藤　清玄さまのこの草履、箱の中にあるからは、正しく二種ともに清玄さまが、お隠しあつたに違ひ




は無い。

尾上　岩藤さまのお詞なれど、佛足守護の金剛草履、お用ひありしは人も知る。その清玄さまがお隠しある程ならば、我れと我が身の罪科を、顯はし殘すこの草履、箱にあるべき用はなし。科を負せんその爲に、入れ置いたりと、憚りながら、この尾上は存じまする。

義澄　御剃髪染衣の清水清玄、佛體受けたる尼法師、何とてかゝる仕業やあらん。よし再應の詮議もなく一圖にそれと岩藤が、詞、ハテ、頼もしい局じやな。

岩藤　御上使の仰せなれど、清玄ならで用ゐぬ草履。よし又外の盗賊ならば、似寄りの、品か拵へ物、入れ置くべきを取急いで、中へ入れたる金剛草履、疑ひもないこれが證據。但し又、御朱印も一軸も奪ひし者が、外にあつてか、尾上どの。

尾上　成る程、その盗賊は外にござりまする。

岩藤　ムウ、外にあるとは、そりや何者。

尾上　關屋さま、最前の艶書を早う。

關屋　ハツ。

ト 懐より三建目に清玄が持ちし文を出し

昨日清水の內陣にて、御祈念終りしその折柄、御朱印の箱の傍らに、落ち散りありしこの艶書、合點行かずと持ち歸り、尾上さまにお目にかけしも、この場の幸ひ、證據の一通。

清岩　して、その文の宛名は何と

關屋　「櫻姬どのへ、淸水淸玄。」

淸玄　ヤア〳〵、その文は。

ト悔りするを

義澄　ハテ、何か證據の手筋とある一通なれば、淸玄どの、立騷がずとお扣へなされ。

尾上　關屋さま、その文體を、この場で早う。

關屋　ハツ、

ト封じを切り

「面影の忘るゝ間無き戀衣、淺々しき心から、常陸帶の解けやらず心を苦めり〳〵、音羽の瀧の露ばかり御酌ませありて、好しなの御返事を願ひあげ候、目出たくかしく、櫻姬どのへ、淸水淸玄。」

淸玄　サア、その艶書は。

尾上　詮議の手がゝり、櫻姬どのへ淸玄と、記した名宛が證據の一通、二品の盜人が外にあると、申し上げたこの尾上が、誤りではござりますまい。

淸玄　サアそれは。

尾上　サア。

淸玄　サア。

尾淸　サア〳〵〳〵。

尾上　なんと確かな證據でござりませうが。

トきつと云ふ。淸玄赤面して思ひ入れ。此うち岩藤、いろ〳〵こなしあつて

岩藤　成る程、その宛名が確かな證據、その文これへ。

ト取つて見る。

淸玄　コレサ〳〵、お局、そりや何を云ひ召さる。その文の宛名が證據になつては。

岩藤　いよ〳〵科は、淸玄さまに違ひござりますまい。

淸玄　ヤ、なんと。

尾上　その方が落ちてあれば、淸玄さまのなされた事とは、どういふ仔細、慥かに名宛の淸水淸玄。

岩藤　イヤ、こりや淸玄ぢやない、訓聲が違うた。

尾上　訓聲が違うたとは。

岩藤　中の文體は、今の通り、讀むに及ばぬ。名宛は即ち、櫻姫どの、清水清玄。

尾上　エヽ。

岩藤　新清水の轟坊にて、御剃髪ありし花子さま、菩提の門の御寺をば、直ぐに御法名清水清玄さまその清玄を讀み違へ、清水清玄とは、マア、大きな間違ひ。

尾上　でも、その文體は慥かに艶書。

岩藤　艶書とは何が艶書。コレ、とつくりと御覧じませ。

ト披き

我が身の戀衣淺々しき心とは、流石輪廻を捨てかね給ふ凡夫心、云ひ號けありし松若どのゝ御事を、音羽の瀧の露ばかりも、忘るゝ間無きお心の内を、櫻姫さまへ御述懐のこの文體、艶く手爾波は女の常、認め置かれし其まゝに、取落されし清水の、内陣箱の側にあつたとあれば、疑ひも無い御朱印の盗賊は、清玄さまに違ひござりますまい。

清玄　いかにも局の申す通り、その文は清水清玄、表向きは道心堅固で、内證は謀叛人の松若丸と云ひ合せ、二品ともに取隠し、入間の家を押領する、その下心に極まつた。



岩藤　殊には鯉魚の一軸は、尾上どの、こなたの預かり。さすればこれもこなたに詮議、其まゝには捨て置かれぬわいの。

尾上　この尾上にお疑ひとあれば、この方からも詮議の筋。最前供へし神酒の中に、藥を浸し入れある事は、あの霧島に問ひ狀かけ聞きたる上は、こなた樣の胸に覺えの一々も、承らねばなりませぬ。

岩藤　ナニ、この局が胸に覺えの一々。

尾上　今日上使のお入りにつき、御朱印の詮議に及び、事をくろめん其ために、桃の酒に藥を入れ、その手筈とも首尾ならず、證據の艶書を剰へ、清玄さまの仕業と云ひなし、詞を飾り、しなを付け、云ひ曲げうとなされても、お家の大事、上使の御前、打捨て置かれぬこの場の仕儀。今この場にて彼の者に、一々問はゞ事明か。一句一言岩藤さま、御返事がござりますか。

岩藤　サアそれは。

尾上　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

尾上　何とでござりまする。